

驛遞局認可

明治十九年七月廿五日發兌

東洋學藝雜誌

東洋學藝社

第五拾八號

（此文學部）
理科大學教授
小藤文次郎

羅馬字會事務所

目 録

○地文學講義第四回 (岩石圈)

理科大學教授 小藤文次郎

○周易起源 (前號ノ續キ)

末松謙澄

○女子の教育を論し併せて耶蘇教擴張の法と説く

(前號ノ續キ)

文科大學教授 外山正一

○河豚の種別 第一高等中學校教諭 松原新之助

○雜報

○鍍銀新法 ○有底器中に於ける大氣の共鳴をを試

験する法 ○口腔の共鳴を試驗する法 ○奇なる望遠鏡

○虹蜺と説明するに必要な試驗法 ○蝦を孚化する

○シヤガタラ芋 ○學者の靴工 ○人類學會 ○鳥花の媒介

となす ○ワレス氏 ○三重縣中學校 ○帝國大學 ○東京

高等女學校 ○音樂演習會 ○劇場改良 ○童幼の成長及

体重 ○世界第一の早船

○批評

日本地震學會報告第九冊第一卷

○雜錄

佛坂紀事

内田周平

○學會記事

東京化學會記事

TŌYŌ GAKUGEI ZASSHI.—Vol. III, No. 58.

(JULY 25, 1886.)

CONTENTS.

LECTURES ON PHYSICAL GEOGRAPHY, IV. (*Lithosphere Illustrated*)
by Prof. B. KOTŌ, Imperial University.

ON ORIGIN OF EKI.
by K. SUYEMATSU.

ON EDUCATION OF WOMEN AND METHODS OF SPREADING CHRISTIANITY.
by Prof. M. TOYAMA, Imperial University.

ON SPECIES OF TETRAODON.
by Prof. S. MATSUBARA, First Middle School,

NOTES.

REVIEWS :— Transactions of the Seismological Society of Japan. Vol. IX Part. I.

MISCELLANIES :— Essay in Chinese by S. UCHIDA.

SOCIETIES :—Tōkyō Chemical Society.

PUBLISHED by TŌYŌ GAKUGEISHA.
No. 1, Urajimbōchō, Kanda.

TŌKYŌ, JAPAN.

東洋學藝雜誌第三卷第五十八號

明治十九年七月廿五日發兌

○

地文學講義第四回

上野公園内東京教育博物館ニ於テ四月十七日開筵
演義摘要

岩石圈 (Lithosphere) 第一次

理科大學教授 小藤文次郎講述

地球ヲ繞圍スル空氣圈及ヒ水圈ニ就キテハ既ニ第二及ヒ
第三回ノ講義ニ於テ諸氏ノ聽聞ヲ煩セリ、然ルニ一方ニ於
テハ空氣圈及ヒ水圈ト一方ニハ地球内部ノ熔熱圈トノ間
ニ猶ホ地上ニ不斷見ル所ロナル礦物ノ凝集物、地球ノ全
部ヲ被覆セリ、之ヲ岩石圈 (Lithosphere) ト云フ、本日ハ
此ノ第三圈ニ就キ講談スル所ロアリヌヘシ
扱空氣ノ重サハ晴雨計ニテ直チニ測知シ得ルヲハ納得ノ
ヲナルヘシ、然ルニ岩石圈ノ重サハ水ト比較シテ幾倍重
キヤハ直接ニ之ヲ知ルニ由ナケレト間接ニ推知シ得ルナ
リ、御承知ノ如ク通常地面ニ露出スル岩石ハ其種夥多ア

レ比皆比重ハ二乃至三ノ間ニアリ、之ノ平均數ヲ取リ二五
乃至二八ヲ以テ地殼ノ重サトスルハ大過ナカルヘシ之ヲ
約言スレハ水圈ヨリモ地殼ハ殆ント二倍半重キモノナリ
今地球全圖ヲ播キ之ヲ通覽スルニ岩石圈ハ乾キタル陸
地トナリテ水圈中ニ散點ス、此ノ陸地大塊ヲ大陸ト云フ、
之ヲ隔タテシムル水匯ヲ大洋ト名ク、大陸ハ地殼ノ降起
セシ部分ニテ大洋ハ窪ミシ處ナリ、此ノ凸凹ハ即チ地球
ノ漸々冷却スルニ由リ岩石圈ノ縞ミシカ爲メニ崎嶇トナ
リシ結果ニソアル

今日ノ大洋、大陸ハ地球創成ノ時ヨリシテ斯ク其儘ニア
ルニ非ラス漸ヲ逐フテ出來セシモノナリ、種々ノ源因ニ
依リ變遷セシ結果ナリ、其地學的諸源因ヲル今日モ存シ
尙ホ未來於テモ休ムヘキニ非ラサレハ地球外面モ之ヲ既
往ニ鑒ミ將來ヲ慮レハ其ノ變換スヘキハ論理ノ鉄則ニ依
リ明々白々タリ、故ニ現今ノ精密ナル地圖ハ未來ト過去
ノ接目ナル今日ノ狀態ヲ示スルニ止マレリ

第十二段 水陸ノ播布及島嶼

水陸ノ比例ハ前回水圈ニ就キ述ヘシ上ハ再ヒ爰ニ贅言ス

ルチ好マス、之ヲ要スルニ海洋ハ陸地ヨリモ二倍七歩チ
 占領ス、陸地ハ多シト雖也之ヲ分テハ五洲トナル、亞細亞、
 阿弗利加、歐羅巴、北ト南ノ亞米利加ナリ、之ヲ數ニ直ス
 片ハ即チ

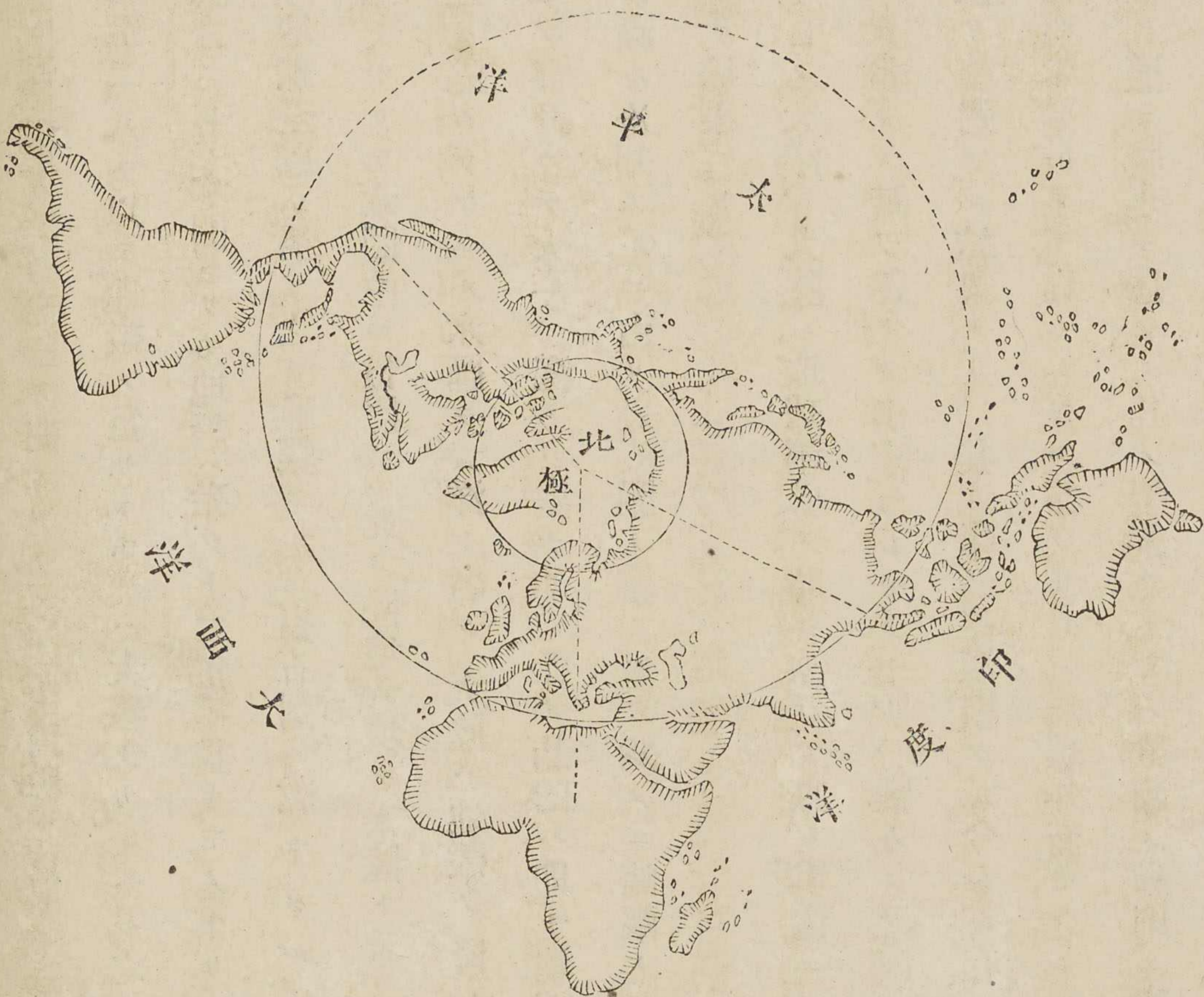
歐羅巴	9,809,456	
亞細亞	44,875,988	
濠斯太良利亞	8,871,074	134,443,889 立方キロ メートル
阿弗利加	29,930,540	
南北亞米利加	40,956,831	

此他尙ホ南北氷洲ニ大陸アレト其審細ハ不明ナレハ此ニ
 加入セス

大陸ニ於ケル如ク海ニ五大洋アリ即チ

大平洋	161,125,673	
大西洋	79,721,274	
印度洋	73,325,872	
南氷洋	20,477,500	274,057,912 立方キロメー トル
北氷洋	15,292,411	
内海	19,818,975	
入海及ヒ湖	7,295,907	

以上ノ表ヨリ見レハ大平洋一個ニシテ既ニ大陸ノ總數ヨ
 リ稍々大ナリ、故ニ水圈表面ノ廣キコトハ之レニテ明瞭ナ
 ルヘシ



海洋ノ位置ト其境界ニ就キテハ區々ノ說アリ皆臆測ニ止

裂圈以南即チ南半球ノ大陸ニハ東西ニ各々山アリ中央ニ

海洋ノ位置ト其境界ニ就キテハ區々ノ説アリ皆臆測ニ止マレト兎ニ角外貌ヲ通觀スルニ一定ノ規律アルカ如シ其規律トハ何ソヤ即チ第四十一圖ノ如ク歐、亞、阿、壕諸大陸ノ容貌北ニ膨レ南ニ縮ミ稍々三角ニ肖似スルヲナリ、北半球ノ陸塊ハ北極ノ周圍ニ郡カリテ幅廣キ所ハ温帶ニ横タヘリ、南半球ニハ各大陸茫漠タル大洋ニ隔テラレ熱帶地方ニ最モ其幅廣シ

南北兩半球ハ第四十一圖中圈線ニテ示セシ如ク大破裂圈ニテ分斷サレ亞、阿交界ノ壽惠須ノ地峽ニハ堀割アリ、南北米ヲ連接スル地峽巴拿麻ノ堀割モ不日竣功ニ至ルヘケレハ兩半球ノ地脈全ク之ニテ打解ケテ西印度、東印度及ヒ地中海ノ如ク此ノ裂縫圈四近ニ陸地ノ破碎物島嶼トナリテ多クハ爰ニ散點郡集ス

東半球ノ歐亞大陸ハ東西殆ント二千三百哩、之ヲ西半球ノ陸地ト比較セハ稍々三倍ニ近シ、左レト其平均ハ大平、大西兩洋ノ不平均相償ヒテ大地ニハ小洋アリ、小陸ハ大洋ト相隣セリ、此北半球諸大陸ノ地勢ハ煩雜チ極メ動植物相肖似スルモノ棲息シ開明人種モ爰ニ寓居ス、左レト破

裂圈以南即チ南半球ノ大陸ニハ東西ニ各々山アリ中央ニ匯地横タハリ動植物モ過去ノ種類ニ稍々近ク又南米ノヒシエレノ人種、濠洲ノ黑奴、南阿ノホテントツトノ如キ不文ノ蠻屬居チ爰ニ構ヘ總テ南半球ハ大古ノ殘風チ帶フルカ如シ

島嶼○嶋嶼トハ四周海水ノ爲メニ圍マル、陸地ノ小部分ナリ、地體構造ト其起因ニ基ツキ區分セハ四トナル

島嶼ノ性質ニ種々アレト山脈ノ外貌、地體ノ構造其近隣ナル大陸ニ肖似セハ之ヲ陸島(Continental Island)ト云フ、此陸島ノ中英吉利ノ如ク近時ニ大陸ヨリ離レシモノアリ、然ルトキハ動物ニアレ植物ニアレ本土ノ物ト同様ナレト地學上古紀ニ於テ既ニ分割サレシモノハ錫蘭、馬島ノ如ク一種特別ノ動物アリ、四國、九州、本洲、北海道ノ如キモ亞細亞ニ近キ矢張陸島ノ部ニ屬セリ

第二ハ火山噴出ニ依リテ島嶼チ成セシモノナレハ之ヲ火山島(Volcanic Island)ト云フ、千島、サントイ、チ伊豆諸島嶼ノ如キハ此部ニ屬シ通常連列セシ郡島ヲ爲セリ

海洋島 (Oceanic Island) トハ即チ珊瑚島ヲ名ケシモノニ
テ暖海ニ繁殖スル珊瑚ノ碎屑相推積シ遂ニ琉球諸島ノ如
ク嶋ヲ作セシチ云フ

沿海島 (Littoral Island) ハ沿海ニ群ガル島嶼ノ稱ニテ
入海、河口ニ珍シカラス、東京灣ノ佃島ノ如ク砂礫、泥土
堆積シ島トナリ又海濱忽然隆起シテ陸地ト離レ又波浪ノ
消磨スルニ由リ、陸前松島ノ如ク、島トナルアリ、右ハ四
種ノ島嶼概畧ナリ

第十四段陸地ノ高低

扱前回ニ於テハ海底ノ深淺ニ就キ數言ヲ費セシカ水面ヲ
拔キ地上ニ表露スル大陸ハ猶更ニ煩雜ニシテ佛ノラプラ
ス氏ハ平均高サチ一千メートルト臆測シ獨ノハンボルト
氏ハ三百八メートルト胸筭ス、左レト登時ハ濠洲及ヒ阿
非利加ノ内地迄ハ詮鑿行届カス隨テ其數モ實狀ヲ表スル
ニ足ラサレト今左ニ新筭クルンメル氏ノ數ヲ掲ク

歐羅巴	300
亞細亞	500
阿弗利加	500
440 メートル 平均	

亞米利加 410

濠太利 250

今大陸ノ容積ト海洋ノ容積トヲ比較スルニ地上ニ露ル、
地ハ海ニ比シ二十一分ノ一ニ過キス、然ル故ニ地上ノ
崎嶇凸凹ヲ平坦ト爲サシメハ陸地隱没シ平均一百六十
メートルノ海深ト成ル可キ道理ナリ

扱晴ニ乘シテ眺望ヲ占命スル高山ニ攀リ四方ヲ見渡セハ
地上ノ崎嶇參差トシテ千態万狀ナリ、海面ヨリ上下ノ比較
上ヨリ云ヘハ高地アリ低地アリ、表面ノ狀態ヨリ論スレ
ハ平原アリ丘阜アリ、山地アリ

低地ハ多ク海濱ニ位シ内地ニ向テハ自然ト堆高ク遂ニ峻
嶮攀ル可ラサル山岳ニ連續ス、左レハ何地ハ低地ニテ何地
ハ高地ナルヤハ其境界判然セス、故ニ大陸高サノ平均數
ナル四百メートルヲ以テ假リニ標準トシ上下ニ區別シ之
レヨリ高キモノハ高地ト稱セリ、低地ト雖モ全ク平坦
ナルニ非ス往々丘阜ノ不齊アリ廣キ所ハ原ト唱ヘ多クハ
草叢茂リ合、所替レハ名モ異リテ歐洲ノハイデ (Haide) 魯
西亞ノステップ (Stepps) 南米ノパンパス (Pampas) 阿

弗利加、亞細亞ノ沙漠ナリ地學上ヨリ論スレハ皆新期時

群山ニ中山アリ高山アリ六百乃至二千メートルノ峰アル

弗利加、亞細亞ノ沙漠ナリ地學上ヨリ論スレハ皆新期時代ニ出來セシモノナレハ山岳ノ塊片及ヒ大河ノ粘土ヨリ成立シ砂礫粘土ノ地体ナリ、地方ニ限リテハ低地海面ヨリ痛ク尙ホ低キ所アリ所謂窪地 (Depression) ト唱へ深キ所ハ水溜トナル、此的例ハ裏海四近ニアリ、裏海ノ水面ハ大洋海面ヨリ卑キヲ二十六メートルナリ尙ホ卑キ地ハ小亞細亞ノ經典ニ名高キ死海ニアリ其水面ハ地中海ヨリモ三百九十二メートル下ニアリト云フ死海ノ深サ五百五十二メートルナレハ該地方ハ大洋ノ水面ヨリ總計九百四十二メートル卑キ割合ナリ

高地ハ高臺、山地、山岳ヨリ成リ、皆海面ヲ抜クヲ四百メートル以上ニアリ信濃 (一、千) 并飛驒ノ平地ハ高臺 (Plateau) ニ屬シ東京ノ高キ處ロヨリ見レハ階段狀ヲ爲セリ

低地若クハ高臺ニ孤立シテ堆高キヲ所ロテ山ト云フ、斯ノ如キ山ハ外貌大概一樣ナレハ地學上ヨリ論スレハ起因異様ナリ、富士山ハ火山ニ基ヒシ、秩父郡ノ武甲山ハ燧石ナリ、水戸ノ築波山ハ花崗岩ト綠岩ヨリ成リ、或ルキハ岩石ノ崩壞シテ一部分殘リ屹立シテ山ヲ爲スアリ

群山ニ中山アリ高山アリ六百乃至二千メートルノ峰アルヲ中山ニ屬セシメ以上ハ高山ト唱ユ、之ヲ構成スル岩石ニ依リ類別セハ均質山、異質山トナリ、岩石ノ構成状態ニ隨テ區分セハ圓錐山、不齊山、連山ト成ル

均質群山ハ信州八ツヶ嶽又仲仙道妙義山、淺間、白根ノ諸山ノ如ク皆同シキ岩石ノ山ナリ、又山陰、山陽ノ花崗岩、總房ノ砂岩山モ此部ニ屬セリ

圓錐群山ハ圓頂狀ヲ呈スル諸山不齊ニ配列シ或ハ一線ニ連列スルモノヨリ成リ、伊豆、千島ノ諸島ノ如シ

地上ニ於テ最モ播布廣ク且最大ナルモノハ異質群山ナリ之ヲ構成スル岩石ハ數多ノ種類ニ屬シ又岩石成生ノ年紀モ異ナルモノナリ、之等ノ岩石或ハ地ニ或ハ彎曲シ或ハ火因岩ノ推入スルアリ其作用煩雜チ極メ、山谿外貌ハ雨水、氷、雪ノ爲メニ崩壞スルニ因リ其結果ヲ表呈スルモノナリ

異質群山チ大別セハ二トナル即チ不齊山及ヒ連山ナリ不齊山ハ外貌甚タ不規律ニシテ確乎タル山軸即チ山ノ方嚮チ有セス又山谿其方嚮一定ナラス、常陸久慈郡ノ花崗岩

阿弗利加 2000
メートル均
西亞ノステップ (Stepps) 南米ノパンパス (Pampas) 阿

山、神戸四近ノ花崗岩山ハ其の例ニ當リ、峻嶮ナラスシテ
 中山ノ部類ニ屬ス、要スルニ一方ニハ稍々急斜ナルモ一
 方ハ傾キ緩慢ナリ、之ヲ成立スル岩石ハ古期層ニ屬ス
 連山ノ的例ハ四國ニアリ西條若クハ高知ヨリ眺ムレハ其
 觀最モ透美ナリ、支那ノ岷崙、印度ノ比麻拉耶、米ノ落機
 及ヒ安提山、歐ノ亞留普須皆然ラサルハナシ地上山脈(第
 四十三圖)ノ播布圖ヲ見ルニ連山ハ大陸ノ沿海ニアリ、牆
 壁ノ如ク縱長ク、谷合モ縱横ニ沿ヒテ規則アリ且地上最
 高ノ峰ヲ頂キ、即チ比麻拉耶ノエバレスト嶺(八、八三九
 メートル)西藏國ノカラコルム嶺(八六一七)南米ノ知
 里アコンカクア(七、三八五)歐ノモンブロン(四、八〇四)
 ノ如シ、又山嶺ノ方嚮ヲ檢スルニ多クハ西南ヨリ東北ニ去
 リ弓狀ニ彎曲シ、彎曲ノ裏ハ西北ニアリ表ハ東南ニ面ス、
 此ノ方向タル偶然ノ出來トニアラス蓋シ地皮尙ホ薄キキ
 地球自轉ノ爲メニ斯ク倚偏ノ方角ニ纏ミシモノナリ
 連山ノ兩側ニ於ケル傾斜ハ規律アリテ何レモ皆同式ナリ
 即チ第四十三圖ノ如ク截斷面ニ依レハ明瞭ナルヘシ、圖
 ノ如ク高キ所三ヶ所アリ最高ノ嶺ハ最新ニシテ卑キモノ

ハ最モ古シ又最高ノ峻嶺ハ大洋ニ面シ傾斜急ニシテ内地
 ニ向テハ傾キ弛メリ

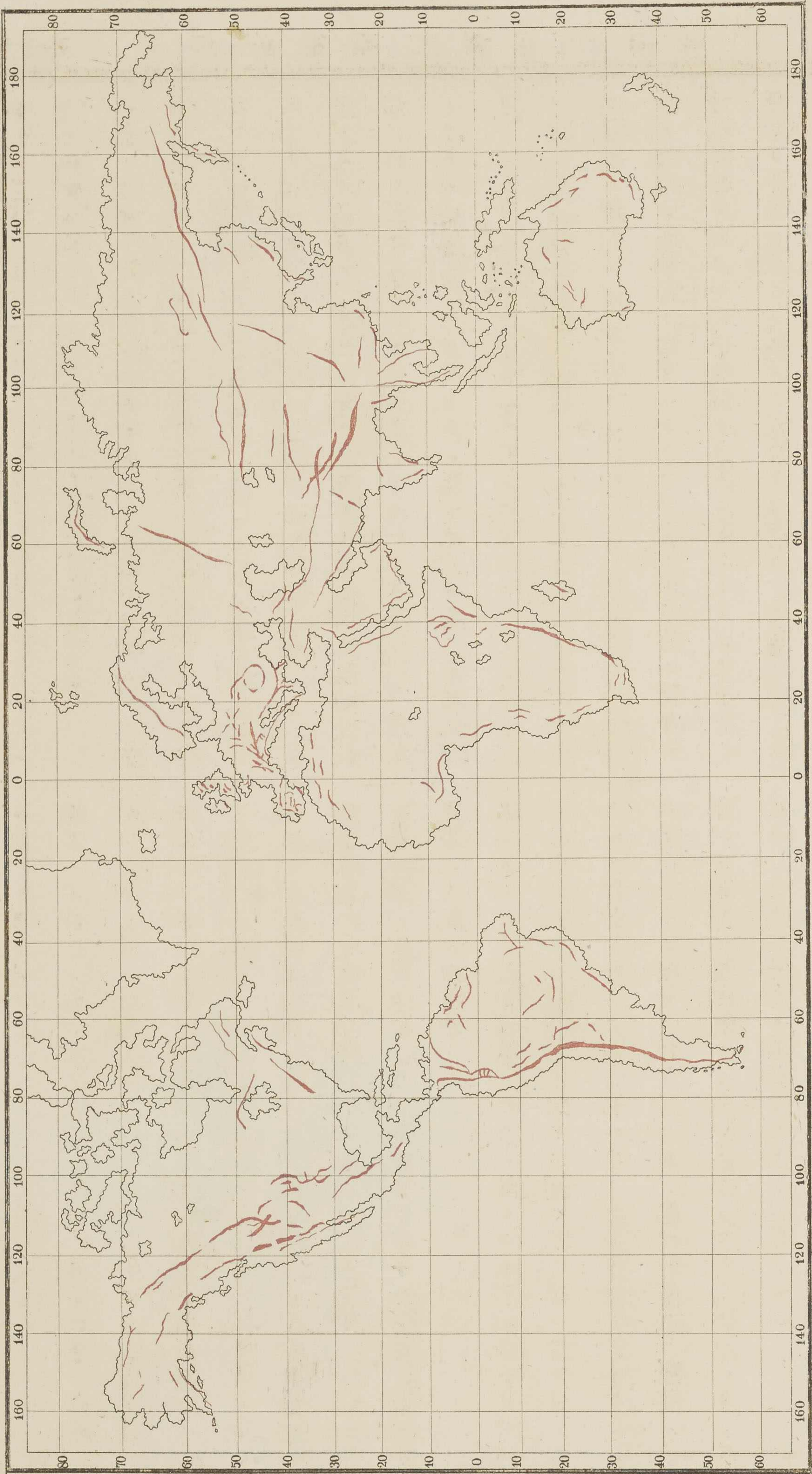
連山ハ不齊山ノ如ク甚タ簡單ナラス、然レモ常ニ數帶ノ
 平行山脈ヲ爲シ岩石皆脈ニ依リテ多少異ナレリ其起因ヲ
 ト問ヘハ地殼ノ纏ミ縮ルコトヲ爲メニ地層褶ムカ如ク曲
 折彎屈セシモノナリ、連山ハ決シテ一曲ニ成リシモノヲ
 見ス、皆數回ノ曲折ニ依ルナリ歐ノ阿留普須山ノ如キハ
 南意大利ヨリ北馬威里國ニ横切レハ二十乃至三十回ノ折
 レ目アリ、南北兩側ノ帶ハ新紀ノ岩石ナレト高ク聳ル中
 央帶ハ古紀ノ地層ナリ

左ハ去リ乍ラ兩側山帶ノ構造一樣ナラス不鈞合ナリ、河
 留普須ノ如キハ北ニ曲リ彎曲表部ハ獨乙國ニ當リ纏ミ寬
 ナレモ彎曲ノ内側ハ意大利ニ當リ曲折急激トナリ左レ故
 ニ地ニアリテ斷層、梯子段ノ如シ即チ此地方ハ陷沒ノ地
 方ニテ地層ニ裂縫夥アリ爰ニ内部ヨリ溶岩迸出シ多ク火
 山トナレリ其圖解ハ第四十四圖ヲ見賜フヘシ

第十五段 岩石

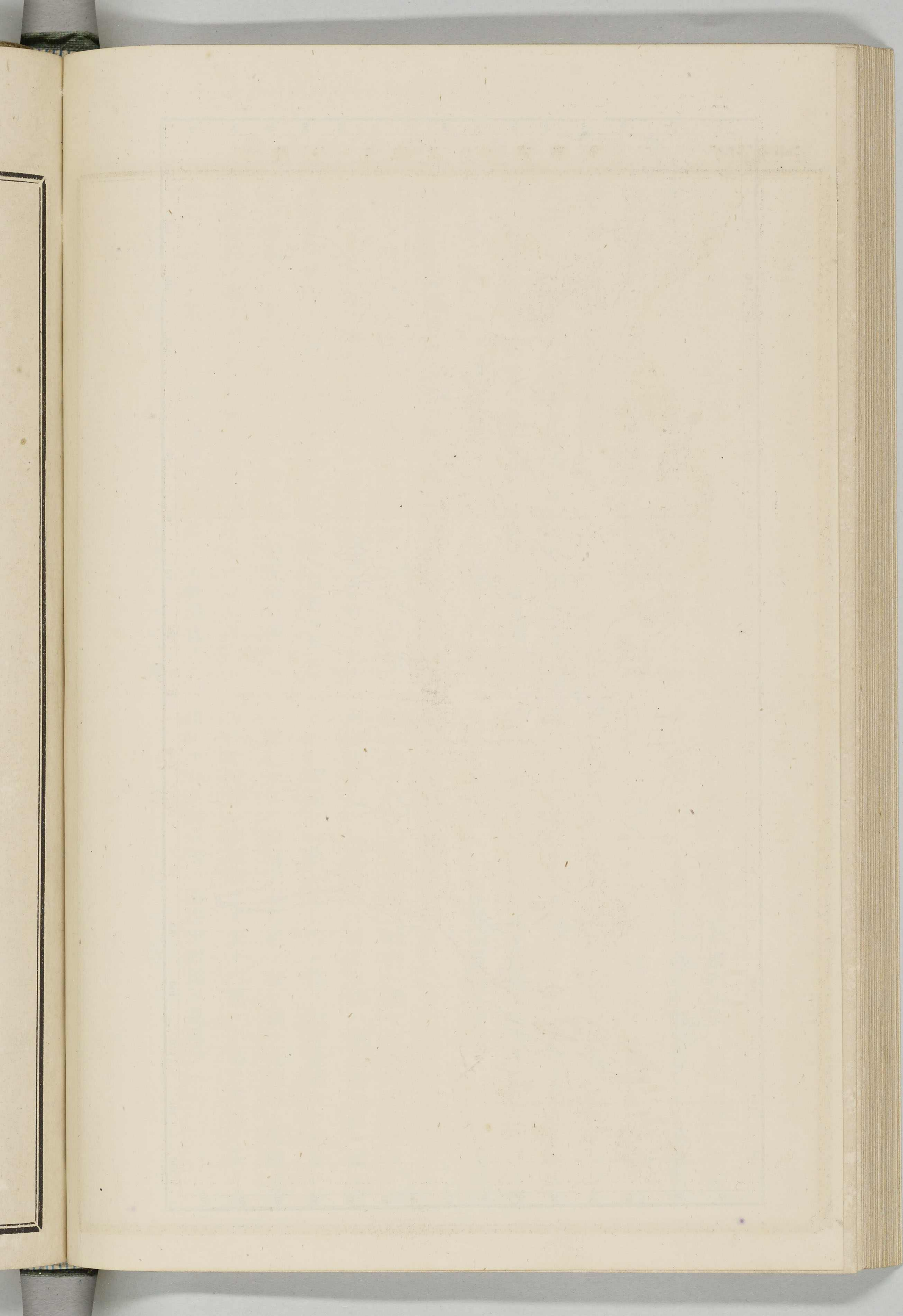
岩石トハ何ソヤ動植物ノ殘滓若クハ無機物ニテ即チ鑛物

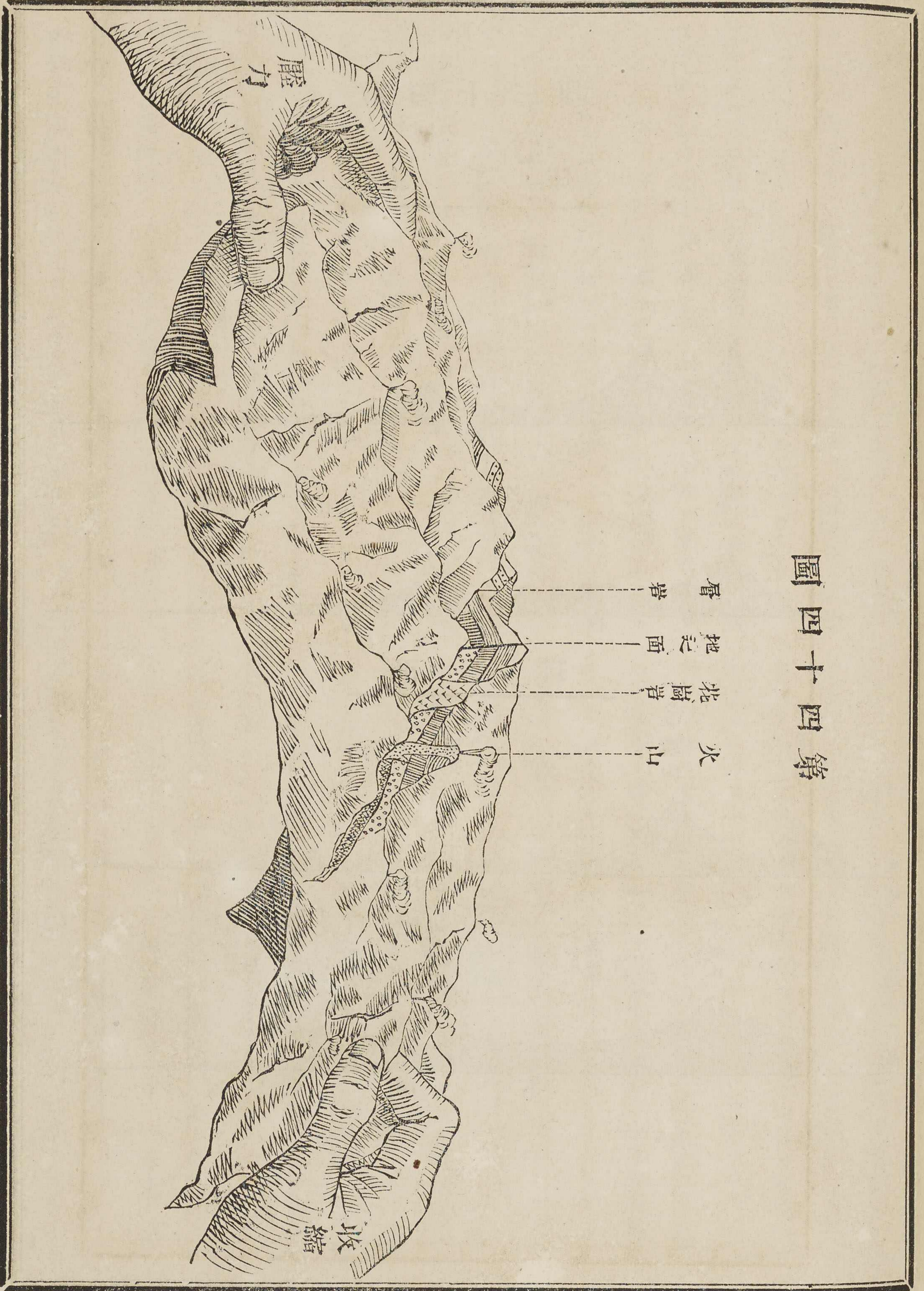
第四十二圖



ノ如ク高キ所三ヶ所アリ最高ノ嶺ハ最新ニシテ卑キモノ

岩石トハ何ソヤ動植物ノ殘滓若クハ無機物ニテ即チ鑛物

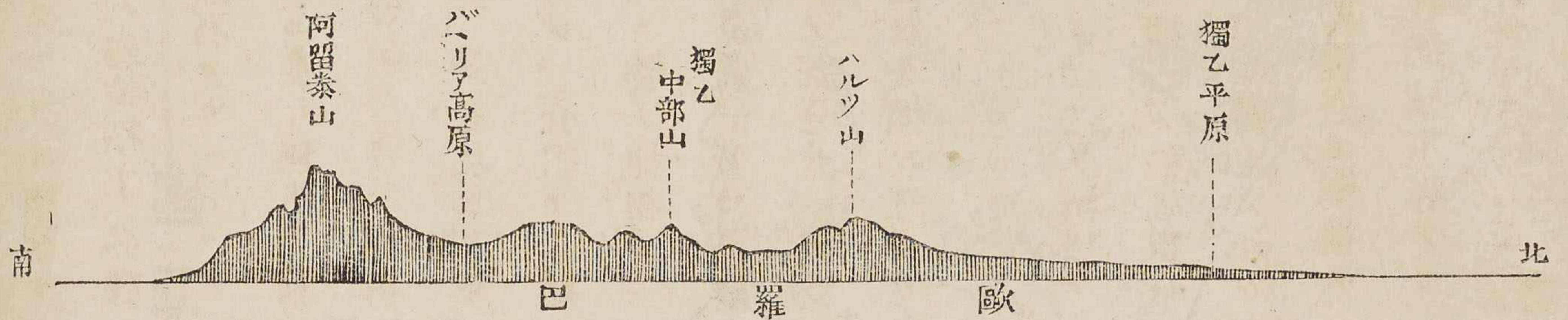
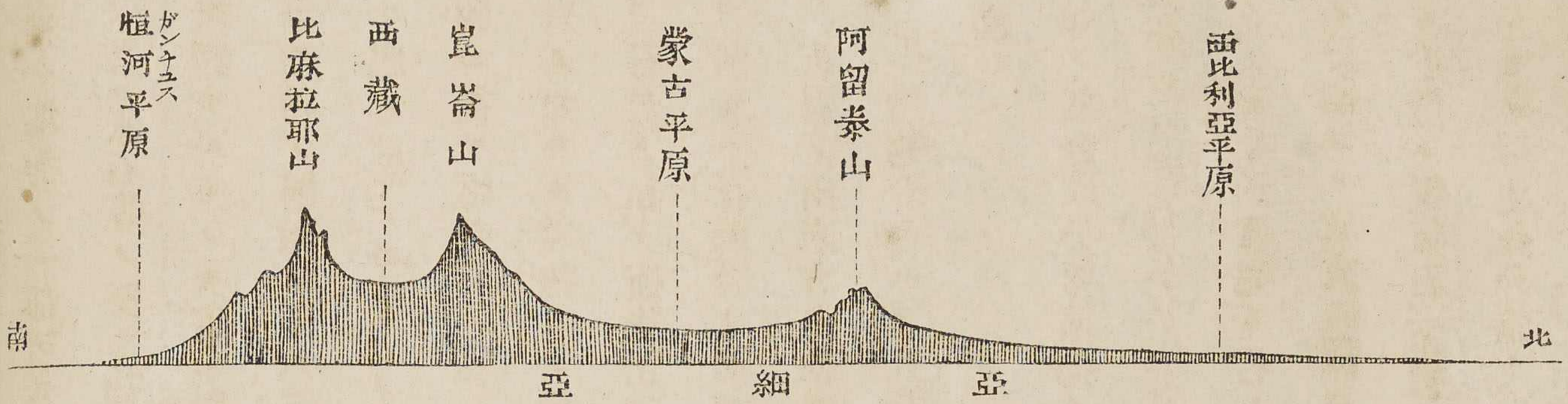




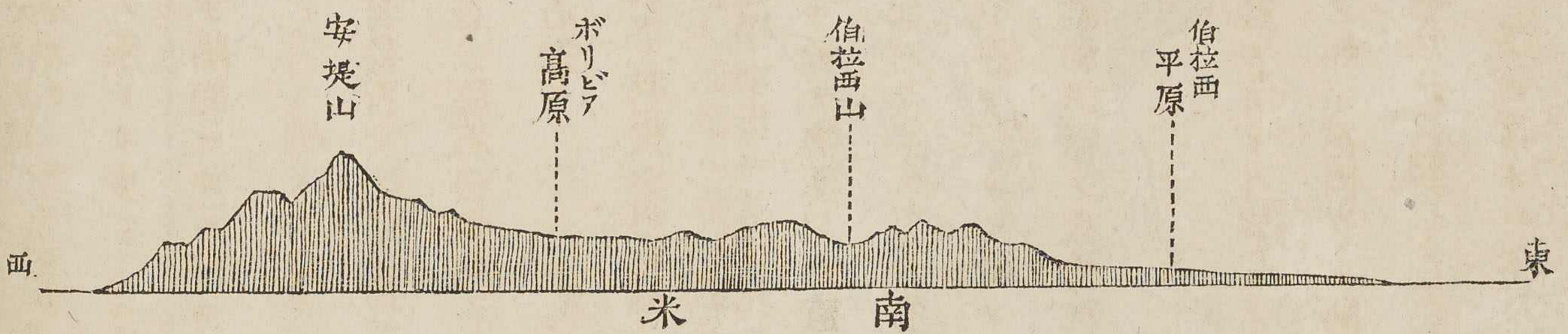
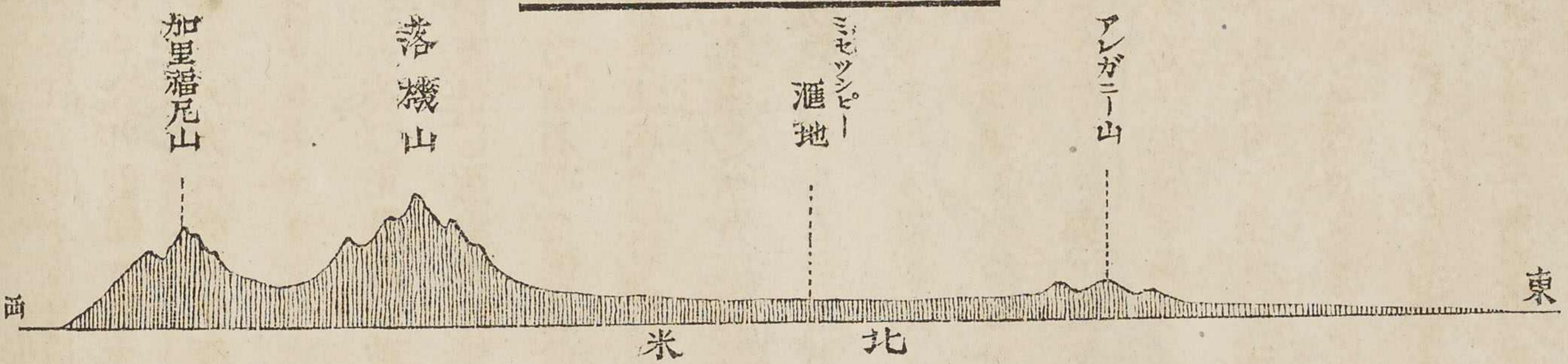
圖四十四第

圖三十四第

球半東



球半西



ト稱スルモノノ凝集シ地殼ノ一部ヲ爲スモノノ總稱ナ

母、長石、石英ハ主成分ニテ電
氣石、金、石等ハ副成分ナリ
ノ區別アリ、諸岩石ノ主

ト稱スルモノ、凝集シ地殼ノ一部ヲ爲スモノ、總稱ナリ、然ル故ニ板岩、砂岩、灰石等ノ堅キ物ハ勿論粘土、砂礫ノ如キ柔ク若クハ粗鬆ナルモノモ尙ホ岩石タリ

岩石圈中ニ産出スル鑛物ノ屬殆ント八百ニ及ヒ無數ノ動植物モ岩石ノ材料ト成ル、然レモ岩石ノ種類ハ僅ニ數百ニ止マリ之ヲ合成物ニ從テ區分セハ雲母、長石及ヒ石英ヨリ成立スル花崗岩ノ如キヲ鑛物岩ト稱シ、介殼ノ凝結セシモノハ動物岩、石炭ノ如ク植物化成ノ物ヲ植物岩ト名ク、石ノ理ニ從テ別セハ花崗岩ノ如ク晶質岩及ヒ砂礫ノ如キ屑碎岩トナリ、岩ノ出來方ニ依リテ細分セハ火成岩及水成岩トナル(甲)鑛物岩ニシテ且品質ヲ備フルモノ、大畧記事ヲ左ニ述フヘシ

鑛物岩トハ前述ノ如ク其合成成分皆鑛物ナリ、之ヲ構成スル鑛物ノ數ニ從テ細分セハ、硅石岩石、灰岩、鹽岩ノ如ク單ニ一種ノ鑛物ヨリ成立スルヲ均質岩ト名ク、花崗岩ノ如キハ雲母、長石、石英ノ三個ヨリ成立ス故ニ異質岩ト別稱ス、然ルニ花崗岩ニ往々少量ノ電氣石、柘榴石、綠柱玉等アリ、故ニ岩石ヲ構成スルモノニ主合成成分ト副合成成分ト別稱ス(花崗岩ニハ雲

母、長石、石英ハ主合成成分ニテ電氣石、金紅石等ハ副合成成分ナリ)ノ區別アリ、諸岩石ノ主合成成分ハ其數僅ニ數十ニ限レリ少シク地學(Geology)ニ思シアル人ハ必ス之等ヲ暗記セサル可ラス即チ地學ノイハレハナレハナリ

- (一) 石英 ○ 正長石 ○ 玻璃長石、○ 灰曹長石、白榴石 ○ 霞石 ○ 白雲母 ○ 黑雲母 ○ 滑石 ○ 温石 ○ 角閃石 ○ 輝石 ○ 橄欖石
- (二) 方解石 ○ 白雲石 ○ 石鹽
- (三) 菱鉄鑛、○ 磁鉄鑛 ○ 赤鉄鑛 ○ 黄鉄鑛

(四) 石墨 ○ 硫黃 (各鑛物ノ記事ハ爰ニ載セス拙著鑛物學初歩ニ就テ見ルヘシ)

鐵物岩ハ通常石理粒狀ニシテ肉眼以テ直チニ各合成成分ヲ識別シ能フル花崗岩ノ如クナレモ往々石理密ニシテ顯微鏡ニ依ラサレハ合成成分判然タラサルモノアリ即チ富士岩(Andesite)ノ如シ又信濃和田嶺ノ火山玻璃ノ如ク全ク非晶質岩ト成ルモアリ

岩石合成成分ノ集リシ模様ニヨリ花崗岩ノ如ク粒狀ナルアレハ片麻剝岩(Gneiss)ノ如ク花崗岩ト同一ノ成分ナレモ其中、雲母一方ニ偏リ集合セハ剝岩トナレリ(剝岩トナレリ)鑛物岩ニシテ雨、氷、雪ノ爲メニ年月ヲ經テ崩壞シ再

ヒ凝リテ岩トナルアリ之ヲ屑碎岩ト云フ變岩、稜變岩、砂岩、泥板岩ノ如シ

(乙)動植物岩トハ珊瑚岩、介殼岩ノ如ク動物ノ固体部分凝結シ又褐炭、黒炭ノ如ク植物ノ化シテ石炭ト成リシモノヲ總稱ス、以上ハ岩石大体ノ區分ナリ、以下ハ石ノ出來方ニ就キ數言ヲ費スヘシ

岩石ノ生成○岩石ノ出來方ハ二因ノ外ナラス則チ一ツハ火ノ作用ニ依リ第二ハ水ノ作用ニテ生成シ、第一チ火成岩ト稱シ、第二チ水成岩ト唱ユ、先ツ第一ニ火成岩ヲ論叙ス可シ

横、神回漕ノ氣船ニ乘リ相摸灘チ夜間駛行ノ際大島ヲ眺ムレハ三原山上時々紅ノ火ヲ放テリ、之レ何ナン他ナラス活火山ナリ、尙ホ近寄リテ山頂ニ躋リ見レハ火口ヨリ酷熱ナル岩汁ヲ湧出ス其物凝冷スレハ燒石トナレリ、地學上曠昔ノ時代ニモ同シ火山ノ作用アリシナレハ古ルキ燒石モアリヌ可シ

斯ノ如キ岩石チ火成岩ト稱ス本邦火山ノ十中ノ九ハ富士

岩 (Andesite) ト稱スル燒岩ノ一種ニ屬シ但馬ノ玄武洞ニアル玄武岩、又粗面岩等ハ皆同様ノ生ナリ

火山岩ハ前記ノ如ク地上ニ凝結セシモノナレト地球中央ノ熔液、厚キ地層ヲ突キ抜ケ地上ニ達セス中途ニテ冷結スルモノアリ之ヲ深成岩屬 (Plutonic rocks) ノ花崗岩、黒花崗岩、綠岩等ニテ火山岩ノ如ク玻璃狀ヲ呈セス皆ナ能ク結晶シ粒狀ナリ、之レハ何故ナルヤト尋ヌルニ地中ニアリテハ壓力強ク且ツ緩慢ニ冷却スルヲ以テ能ク結晶シ得ルナリ却説地中ヨリ湧出スル岩汁ハ鉛等金屬ノ鎔ケル如ク水ノ作用ヲ仰カサルニ非ス皆地中ニ循環スル水、蒸氣トナリ岩汁ニ濕入シ此ノ水蒸氣ハ即チ火山放裂ノ顯像ヲ生スルナリ、水冷結ノ後モ尙ホ去ラス岩石チ薄片ト成シ顯微鏡ニテ見レハ水ノ包所 (Inclusion) 所々ニアリ特ニ花崗岩ノ如キハ多量ノ水濕ニ依リ斯ク充分ニ結晶セルモノナリ火成岩ノ生成ハ先ツ大體右ノ如クコシテ水成岩ハ水ノ作用ニ賴リ崩解サレ且ツ輸送サレ又沈底サレ然ル後初メテ疊ニ相積ミ層岩ヲ構成スルモノナリ、水ノ作用ヲ區別セハニアリ器械的并ニ化學的ノ作用ナリ

器械的ノ作用トハ既ニ存在ノ岩石崩解シ砂礫、泥濘トナ

無キ道理ナリ

器械的ノ作用トハ既ニ存在ノ岩石崩解シ砂礫、泥濘トナ
リテ水ニ輸送サレ又沈底サレシ岩石ヲ云フ河口、海底、沼
澤ニ於テハ不斷目撃スル所ナリ、化學的ノ作用トハ岩
石ノ成分、水ニ一回溶解シ水ノ蒸發ニ由リ沈澱セシモノ
ニテ其の例ハ岩鹽、石膏ナリ、斯ク水成岩ハ皆既存ノ岩石
圈ニ空氣圈及ヒ水圈ノ働キシ結果ナリ

火山岩ト水成岩ノ大要ハ前述ノ如クナレモ爰ニ一種特別
ノ岩石類アリ即チ阿淡德島ヨリ讚岐松山ニ至ル四國山脈
ヲ構成スル綠泥岩、角閃剝岩、千板剝岩等ニテ常陸久慈郡
ヨリ阿武隈川及ヒ北上川ノ東部ノ山脈モ皆同岩ナリ、之
ヲ手ニ取り見レハ剝易キ性アリテ水成岩ニ似タリ、合成
分ハ石英、雲母、長石、角閃石等ニテ一方ヨリ研究セハ火山
岩ニモ肖似ス、斯ク兩成ノ岩石質ヲ連帶スルモノニテ學
者其生成ノ解釋ニ苦シメリ

彼ノ晶質剝岩 (Crystalline Schist) ハ深成岩ニ肖似スル所
ロアリ故ニ或ル學者ハ之ヲ以テ地球火團ヨリ冷結ノ際初
メテ固結セシモノト見做スモノアリ、左レド斯ク想像セ
ハ火成岩ノ外ナラサル故ニ層狀ヲ成ス可キハ萬一之レ

無キ道理ナリ

第二論者ノ説ク所ハ原ト普通ノ水成岩ニテ壓力ト熱地
ノ爲メニ性ヲ變シ所謂變性岩 (Metamorphic rocks) ト成リ
シモノ、如ク開説スレト各種異様ノ岩石相插間シ其限界
判然タルヲ見レハ變性セシトモ考ヘ及ハサレハ現今ニ於
テハ地學者初メヨリ此岩屬ハ晶質ニシテ化學上ノ沈澱ノ
如ク生成セシト思考セリ左レト此等ノ岩石現今ノ狀態ニ
テハ容易ニ水ニ溶解シ能フヲハ理解シ難キコ似タレモ太
古ノ時ハ萬事今日ト異ナリテ水ノ温度高ク且ツ非常ノ壓
力アリ爲メニ今日ニテハ考ヘ及ハス岩石皆食鹽ノ如ク其
水ニ溶解セシナラン

斯クテ漸々水底ニ於テハ膠質ノ沈澱ヲ生シ其寒ムル實際
ニハ石英、長石、雲母等ニ結晶シ遂ニ晶質剝岩ヲ生セシト
ノヲナリ、然レモ世遷リ地球ノ有様モ變革シ眼前晶質剝
岩ノ生成ヲ見ルヲ得サルヨリ遂ニ學者社會ニ種々ノ議論
ヲ醸スニ至レリ

○ 周易起源 (前號ノ續)

明治十六年七月廿一日於倫敦 末松謙澄講述

繫辭傳ニ又

天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十、天數五、地數六、五位相得而各有合、天數二十有五、地數三十、凡天地之數五十有五、此所以成變化而行鬼神也、

ト云フ條アレハ是レ自ラ別論ニシテ參天兩地ノ比例ト相關涉スル所アルコアラズ顧フニ希臘理學ノ一派ニハ數ヲ以テ宇宙造化ノ根元トナス者アリ茲ニモ成變化而行鬼神トアレハ或ハ微妙ノ深意アル歟トモ思ヒタレハ惜哉其ノ言フ所此文ニ止マリ別ニ緻密周到ノ議論ヲ見ザレハ未タ數ヲ以テ造化ノ根元ト爲ス程ノ論トモ思ハレズ (ピサゴリアン) 門ノ一派ニ十ヲ以テ數ノ本体ト爲ス者アリ其故ハ凡ソ數ハ十ノ順環ニ成ル而シテ十ハ其中ニ萬物ノ性情ヲ備フ奇數アリ耦數アリ動ノ象アリ靜ノ象アリ善アリ惡アリ萬般ノ數ハ悉ク十中ニ含ム所ノ諸數ノ運轉功用ニ出ザルナシ其爲物也大且完天地ノ變化ヲ行ヒ萬物ノ生命ヲ掌ルト云アリ又一派ハ四ヲ以テ數ノ本体トナシ宇宙無盡藏ノ源泉ハ茲ニ在リトナス所謂四トハ一ヨリ四ニ至ルマデノ四數ノ高即チ十(1+2+3+4=10)ト見ルモ或ハ初數ノ四奇數ト四耦數トノ高即チ三十六(1+3+5+7+9+11+13+15+17+19+21+23+25+27+29+31=36)ト見ルモ可テリトリツタルハ評セリ繫辭傳ノ說

ク所天地ノ數十ニシテ之分賦スレバ

地 2 4 6 8 10 30
十合 55
天 1 3 5 7 9 25

トナルト能ク相似タリ○愚著希臘古代理學一斑ヲ參考スベシ○老子ニ道生一、一生二、二生三、三生萬物トアリ又鶡冠子ニ有一而有氣、有氣而有道、有道而有圖、有圖而有名、有名而有形、有形而有約、約決而時生、時立而物生トアレハ是レ亦未ダ全ク造化基數ノ(但シ天地ノ數ヲ算起シ十ニ說ヲ發揮スルニ足ラス) 至テ止ムハ凡ソ數ハ一ヨリ十ニ至リテ其任ヲ盡ス者ニテ十以上ニ至レバ其實復タ始メニ還ル故ニ細密ニ論スレハ數ノ極ハ十ニ在リ十以上ハ推シテ千萬數ニ至ルモ皆十以內ノ數ノ順環ニ過ギズ故ニ十ヲ成數ト云フ萬物ノ數其理悉ク十中ニ包含ス是レ繫辭傳ノ十數ヲ天地ニ配分シテ所以成變化行鬼神ト論セル所云ナラン 以上述ブル所ニテ六十四卦組立ノ道理ハ己ニ詳悉ス卦辭爻辭ノ說明モ略足ル此六十四卦ハ古ヨリ之ヲ占筮ノ用ニ供ス其法ハ著策ヲ用ヒ六爻ヲ畫シ得ル所ノ卦ニ從ヒ其ノ吉凶悔吝ヲ考察ス卦辭爻辭己ニ定マリシ後ハ專ラ其辭ニ因リ當下適應ノ考察ヲ下シタル者ノ如シ著策ノ用ハ其ノ

來ルヤ久シ(繫辭傳ニモ天下之亶々者、莫大乎蓍龜トア

ニ因リテ一爻ヲ畫スル法タリシトハ明ナレハ其餘ハ明知

來ルヤ久シ（繫辭傳ニモ天下之亶々者、莫大乎著龜トアリ易ハ著ノミ用レ此處ニテハト筮ヲ兼テ

著龜ヲ併ベ論セル者ト見ユ後世ノ筮竹ハ著策ヲ摸シタル者ナリ説掛傳冒頭ニモ

昔者聖人之作易也、幽贊神明而生著、

トアリ繫辭傳ニモ

夫易何爲也、夫易開物成務、冒天下之道、如斯而已者也、

是故聖人以通天下之志、以定天下之業、以斷天下之惑、

是故著之德圓而神、卦之德方以知、

トアリ然レモ古代ノ筮法ハ如何ト問フニ繫辭傳ニハ

大衍之數五十、其用四十有九、分而爲二、以象兩、掛一

以象三、揲之以四、以象四時、歸奇於切以象閏、五歲再

閏、故再閏而後掛、乾之策二百一十有六、坤之策百四十

有四、凡三百有六十、當期之日、二篇之策萬有一千五百

二十、當萬物之數、是故四營而成易、十有八變而成卦、八

卦而小成、引而伸之、觸類而長之、天下之能事畢矣、

トアリ因テ策數ハ五十ヲ用ヒ之ヲ手ニ任セテ二分シ大極

ヨリ兩儀ヲ生スルニ象リ其ノ一本ヲ振キ他所ニ掛ケ兩儀

進テ三才トナルニ象リ四ヲ以テ之ヲ數ヘ去リ四時ノ順環

ニ象リ之ヲ繰リ返スヲ數度ニシテ餘策ヲ合算シ其ノ奇耦

ニ因リテ一爻ヲ畫スル法タリシトハ明ナレモ其餘ハ明知

スルニ由ナシ其此條ヲ解スルモ諸說紛々タレモ到底古代

ノ眞面目ニアラズ朱子ノ筮儀ノ如キモ古義ニ合セス數理

ニ適セサル者アリ例ヘハ歸奇於切ヲ餘策ヲ無名指間ニ挾

ムヲ云フトスルハ古義ニアラス四ト五トヲ同シク奇數ト

シハト九トヲ耦數トスルハ數理ニ適セス（講述者筮法ニ

論アレモ別）故コ今易ノ何物タルヲ論スルニ姑ク六十

四卦ハ占筮ノ用ニ供シ之ヲ得ルニハ著策ヲ用ヒ得ル所ノ

卦ニ因テ其ノ示ス所ノ吉凶ヲ考察スルノ法タリシト想像

シ置ケハ足レリトス

扱支那通例ノ傳説ニ據レバ前コモ云フ如ク伏羲始メテ八

卦ヲ畫ス六十四卦モ亦蓋シ其ノ畫スル所文王周公ニ至ル

コ及ンテ始メテ卦辭爻辭アリ孔子之ニ踵キ十翼ヲ作ルト

云唯此等ノ傳説ヲ讀ムニ付テハ諸君ニ注意スベキ一事ア

リ他ニアラズ支那ノ弊著明ノ事業ハ大抵之ヲ聖人ノ功コ

歸ス此弊殊ニ漢以來ニ甚シ史傳ヲ閱スレバ伏羲神農ノ如

キ一世ノ發明幾多ナルヲ知ル可ラズ伏羲ノ畫卦文王周公

ノ繫辭亦此類ナラザルヲ保ス可ラズ伏羲畫卦ノトハ前ニ

引用セシ如ク繫辭傳ニモ一言アリト雖ヒ文周ノ繫辭ニ至リテハ易傳中亦見ル所ナシ其纒ニ髣髴タルハ繫辭傳中ナル

①其稱名也、雜而不越、於稽其類、其衰世之意邪、

②易之興也、其於中古乎、作易者其有憂患乎、

③易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪、當文王與紂之事邪、是故其辭危、

ノ三節ノミ未タ明ニ文王周公ヲ指シテ卦辭爻辭ヲ作ル者トスルヲ聞カス其後數百年始メテ此數節ヨリ附會シ文王ヲ以繫辭者(卦辭爻辭共)トスルノ説出ツ又數百年ニシテ前ニモ云フ如ク爻辭中ノ數語ト左傳ノ文トヲ見テ爻辭ヲ文王ノ作トスルハ不穩ヲ悟リ爻辭ヲ周公ノ作トスル説出タリ蓋シ深ク信ヲ置クニ足ラザルノ説ナリ且ツ又韓宣子ガ春秋ト易象トヲ見テ吾乃今知周公之德與周之所以王也ト云ヒシモ春秋ト易術トヲ稱美シ之ヲ周公ノ餘澤ニ歸シタル語氣ニ過ギズ未ダ以テ爻辭ヲ周公ノ作トスルノ証トナスニ足ラズ若シ否ラズシテ此語ニ據リ爻辭周公ノ作ル所トスル時ハ春秋亦周公ノ記スル所トセサル可ラス是

レ決シテ此事ナキナリ況ンヤ茲ニ所謂易象ノ象ハ汎シ易術ノ象ヲ指シタル者ニテ必ズシモ爻辭ヲ指スモノニ非ザルニ於テチヤ尤モ聖人ト云フ名稱ハ屢々易傳中ニ散見スレヒ孔子時代ノ聖人ハ寧ロ汎ク大有徳人ヲ指スモノニテ必ズシモ一々ニ此人彼人ト適指ノ人アルニアラズ後世ニ至リ古代ノ大有徳人名ノ史上ニ著ハレタルモノ若干チ數ヘ之チ聖人ト稱シ此外聖人ナキ者ノ如クニナシ遂ニ古書中ニ聖人ノ字アレバ必ズ之チ右ノ若干名ノ聖人中ノ誰ニカ符合セシメントスルノ弊ヲ來シタリ是亦學者ノ宜シク察セザル可ラサル所ナリ若夫孔子自ラ十翼ヲ作ルト云ハ支那學者中ニモ絶テ異議ナキニモアラス諸翼及ヒ孔門ノ諸書ヲ驗スルモ更ニ明確ノ証據アルニアラス獨リ明確ノ証據ナキノミナラズ繫辭文言ノ二傳ニハ數多ノ子曰アリ論語中庸等ノ文例ニ據レバ子トハ孔門ノ諸子孔子ヲ尊稱スルノ語ナレバ孔子自ラ子曰ト稱スルノ謂ナシ加之各翼ノ説ク所前後符合セザル所ナキニアラズ其中ニハ例ヘハ説卦傳後半ノ如キハ眞ニ宣聖ノ意匠ヨリ鍊リ出シタルモノトスルニ足ラザルアリ去レバ十翼ハ蓋シ數篇ノ文ヲ合

ル所トスル時ハ春秋亦周公ノ記スル所トセサル可ラズ是

ノトスルニ足ラザルアリ去レバ十翼ハ蓋シ數篇ノ文ヲ合

纂シタル者ナルベシ其記者亦必ズシモ一ナラズ猶太耶蘇
 諸教ノ聖書モ各種ノ文章ヲ合纂シタルト相似タリ例ヘハ
 彖象二傳ノ如キハ或ハ孔子ノ自作ナラン繫辭文言二傳ノ
 如キ己ニ子曰ノ字モアレバ孔門ノ學士其意ヲ追述セシ者
 ナルベシ其餘ハ孔子ノ意ヲ承ケタル所モアルベク當時易
 學者流ノ間ニ行ハレシ字解ヲ採輯セシ所モ有ベシ從來學
 者多クハ聖人ノ名ニ拘束セラレシカ故ニ易ヲ解スルニ徒
 ラニ無用ノ苦心ヲ費セシ所モアリト雖也右ノ如クニ觀察
 スル時ハ易ノ全体ヲ解スルニ於思ヒ半ニ過ル所アルベシ
 將又八卦六十四卦ノ出テ來リシ道理ハ上ニ詳悉シタリト
 雖也易ノ此域ニ至リシハ蓋シ年所ノ久キヲ經テ次第ニ然
 リシニ相違ナシ之チ一人二人ノ造意ニ出タルガ如ク論ス
 ルハ人文漸化ノ理ヲ思ハザルノ說ニ似タリ蓋シ事ヲ爲ス
 ニ占卜様ノヲチ爲スハ人情ノ常ナリ小童アリ林中ニ散步
 ス西ニ行カン乎東ニ行カン乎心自ラ決セス杖ヲ地上ニ樹
 テ云ク其ノ倒ル、方ニ行カント杖倒ル則チ西ニ東ニ其倒
 ル、方ニ行ク或ハ二人事ヲ爲ス物ヲ手中ニ取り丁半ヲ以
 テ誰何ヲ決ス是亦一占法ノミ人間社會ノ初ニ當テ如此單

簡ノ占法ハ自然ニ其間ニ行ハレシニ相違ナシ況ンヤ降り
 テ人心稍疑懼ヲ懷クノ世トナルニ於テチヤ而シテ初メハ
 人々自ラ占スルヲ猶小童ノ杖ヲ樹テ或ハ二人丁半ヲ以テ
 事ヲ決スルト同シキモ後ニハ鄉黨ニ人アリ自ラ能ク占ス
 ルニ誇リ人亦稍之ヲ信スルニ至ラン從テ遂ニ占筮ヲ以テ
 其職ノ如クニスル者アルニ至ラン其方法ハ固ヨリ種々ナ
 ルベシ支那筮法ノ起リモ蓋シ如此モノナリシナラン朱子
 ノ初但有占而無文、徃々如今之環玦相似耳ト云フモノ即
 チ是レナリ而シテ諸筮法中ニハ筮竹ノ如キモノ一把ヲ置
 キ其中ヨリ背攫ニ幾本カヲ攫ミ其下數ト半數トノ別ニ隨
 ヒ吉トカ凶トカ云ヒシ類ノ一法アリシナラン人情ノ未タ
 全ク質撲ヲ離レザル頃ハ極メテ簡單ナル法ニテ其心ヲ滿
 足セシムルニ足ル尋テ人情込入ルニ隨ヒ筮法モ次第ニ込
 入り又口上ニテ言聞セシノミテハ不足ニテ乃チ **若クハ**
ノ如キ者ヲ木片竹片等ノ物ニ研リ付ケ丁半ノ証トナス
 ニ至リシヲ有シカモ知ル可ラズ六爻ノ起リハ或ハ如此モ
 ノナラン次テ占筮ノ稍盛ナルニ隨ヒ之ニ答フルニ斷然タ
 ル黑白ノ答ヲ以テノハ諺ニ所謂尻ノアグルヲ多ケレバ始

メテ曖昧ノ辭ヲ以テスルニ至リシナラン譬ヘハ人アリ物
 ナ途中ニ失フ來テ其物ノ返リ來ルヤ否ヲ問ハンニ筮者ハ
 決シテ歸リ來ラズト云ハズシテ「若シ盜ノ手ニ入ラバ返
 リ來ラズ常人ノ手ニ落チシナラバ返リ來ルベシ」ト云フ
 如キ答ヲナスナラン筮辭曖昧ノ元ハ此ニ在リ是等ハ必ズ
 シモ人ナ欺クノ故意ナキモ自然ノ勢然ラザルヲ得サルベ
 シ昔シ希臘コテ名高カリシデルフヒー神社ノ神託モ其答
 ハ常ニ意アルガ如ク意ナキガ如ク其實曖昧ニシテ祈請者
 ノ判斷如何ニ在リシモ亦此類ナリサイラス王將ニ希臘ヲ
 攻メントシ神託ヲ請フ答アリ曰ク汝將ニ一大國ヲ破ラン
 トスト王以テ敵國ヲ破ルノ兆トス後チ却テ自ラ其ノ國ヲ
 破ル嘗テ兄弟アリ事ヲ爭ヒ託ヲ請フ答テ曰ク先ツ母ヲ拜
 スル者勝ツ一人夜チ日ニ繼キ歸テ其母ヲ拜ス一人密ニ地
 チ拜ス地ヲ拜スル者勝ツ人其故ヲ問フ對テ曰ク吾先ツ地
 チ拜ス地ハ萬物ノ母ナリ我ガ勝ツ所以ナリト云ヒシトノ
 話シアリ以テ其餘ヲ推知スベシ己ニシテ復タ曖昧ノ辭モ
 單純ノ辭ハ神妙ナラザルヨリシテ始メテ所謂象ト云フ
 出デ此件ハ龍攫雲ノ象アリトカ馬涉水ノ象アリトカ云フ

如キ辭ノ出テ來リシコト世ノ諺ノ自然ニ世間ニ起ル如クナ
 リシナラン己ニシテ歲月移リ其術進ムニ隨ヒ此類ノ辭ハ
 其數モ増シ其体モ備ハリ遂ニハ筮家ノ常文句ノ如クナリ
 シナラン而シテ筮ノ結果ニ隨ヒ筮ヲ乞フ者ノ事情ニ應シ
 得ル所ノ辭ニ恰好ナル解説ヲ付スル事トナリシナラン例
 ヘハ上ニ假說スルトコロノ辭ヲ以テ云ハンニ若シ材幹氣
 慨アル士人が將ニ何事ヲカ爲サントセル時ニ龍攫雲ノ辭
 ナ得タラハ神龍天上ニ躍リ雲ヲ攫ム英雄事ヲ爲スノ形ア
 リト答ヘ若シ貪欲ナル賈人が投機セントスルニ遇ヒ龍攫
 雲ノ辭ヲ得タランニハ龍雲ヲ攫ム其狀壯ナリト雖ヒ雲ハ
 攫ミ得ベキ者ニアラズ故ニ此商賈ハ失錯アルベシト答フ
 ルコトモアララン將ニ旅行セントシ水行センカ陸行センカト
 疑フ人ノ爲メ馬涉水ヲ得タラハ利涉大川トテモ答ヘ將ニ
 人ニ嫁セントスル者ノ爲メ馬涉水ヲ得ハ馬ノ本性ハ水ヲ
 渉ル者ニアラズ馬ニシテ水ヲ涉レハ難苦多シ此縁談ハ面
 白カラズトデモ答フルコトモアララン如此形狀ニテ筮家ノ常
 文句ハ愈々世間ニ積リシナラン

ノ二爻ヲ重テ四象トナシ又一爻ヲ重テ八卦ト

出テ此件ハ龍攪雲ノ象アリトカ馬涉水ノ象アリトカ云フ

ノ二爻ヲ重テ四象トナシ又一爻ヲ重テ八卦ト

シ八卦ヲ重テ六十四卦トナセシモ亦蓋シ此等ノ地歩ニ
出シカモ知ル可ラス則チ始メ一タビ
之ヲ二重シ
ノ四ヲ得ルハ差シタル深工
夫ナクモ自然ニ出來ルナルベシ必スシモ四時ニ象ルカ爲
メニ作ルト解セザルモ可ナリ已ニ四象ヲ得レハ今一爻ツ
、加ヘ其ノ如何ナル物トナルカヲ見ント欲スル念モ自然
ニ生シ來ルコトアルベシ必スシモ三才ニ象ルノ意想ニ出ツ
トセザルモ可ナラン已ニ三爻ヲ重ヌレハ八卦ヲ得ルハ當
然ノ結果ナリ八卦ニ小成シ一タビ茲ニ止マル是レ到底
偶然ニ過ザルベシト云フモノ、三ハ一種ノ妙數ニテ能ク
人ノ注意ヲ引起ス者ト見ヘ婆羅曼ニ三神アリ耶蘇教ニ三
位アリ佛教ニ三身三寶アリ神道ニ化造三神アリ「ピカゴ
ラス」門ノ一派ニ三ハ始中終ノ象アリトテ三ヲ以テ數ノ
完全ナル者トセシ説アリ其他三皇三光三種神器等ノ語擧
テ數フベカラズ左スレバ三爻ヲ以テ一卦トセシモ三ノ一
種ノ妙數タル所ノ自ラ然ラシムル所ナラン歟已ニ八卦ア
レバ自然ニ之ヲ二重シテ其ノ何物トナル歟ヲ見ルコトモ生
シ來ラン之ヲ二重スレバ則チ六十四卦ハ隨テ生ス但シ其

ノ八卦トナリ六十四卦トナリシハ預メ數理ヲ考ヘテ之ヲ
割リ出セシ人アル歟モ知ラサレモ之ヲ作ル前ニ三才ノ道
各々ニヲ以テ之ヲ三ニ乘シ六ヲ得テ六十四卦ヲ造リタリ
ト云程ノコトハナカリシナラン如此ニシテ六十四卦モ出テ筮
家ノ常文句モ増加シタル處ニ人アリ常文句ヲ拾集シ足ラ
ザルハ之ヲ補ヒ各卦ノ下ニ配付シ一書トナシタルナラン
其趣ハ西洋ニテ何時トナク出テ來リタル世間ノ諺ヲ拾集
シテ書冊トナセルモノアルト一般ト知ルベシ今ノ經文ハ
即チ此等ノ常文句ナラン蓋シ經文ハ首尾悉ク譏語ノ如キ
者ニシテ最モ奇怪ヲ極ムルヲ以テ之ヲシテ一人二人ノ造
意發明ニ出ル者タラシムレハ其人ハ殆ント瘋癲者ナリシ
歟トマテ疑フヲ得ルト雖モ若シ之ヲシテ年月ノ久チ經テ
筮家者流ノ間ニ起リタル者タラシムレハ奇怪モ亦怪ムニ
足ラザル者トナル但シ易術ノ最モ盛ニ行ハレ常文句モ大
ニ其數ヲ増加シタルハ殷周代謝ノ頃ニ在リシ歟モ知ルベ
カラズ又周家制度文物ノ發達ハ周公施政ノ頃ニ著シカリ
ケレバ經文編纂モ此頃ニ在リシ歟モ未タ知ル可ラズ若シ
果シテ然レハ彼ノ易之興也、其當殷之末世、周之盛德邪云

々ノ語トモ符合スト雖也文周ヲ以テ筆ヲ把ル者トスル則チ太甚シ倫敦市中ニ鳥籠ヲ街頭ニ出シ其前ニ小紙片ニ文字アル者ヲ數多併ベ置キ一錢ヲ與フレハ籠中ノ小鳥チシテ籠戸ヲ出デ一紙片ヲ嘴頭ニ喙ヘ來ラシム披キ見レハ其人運命事業ノ吉凶成否等ヲ記ス又日本ニモ西洋ニモ辻占アリ是等ニ用ユル文句ニハ頗ル妙語奇句モ少ラズ若シ之ヲ拾集シ大學者チシテ其想像ヲ以テ註解チ下サシメバ可也ノ書冊ヲ得ルヲモアラソ左スレハ易ノ經文チ以テ易家流用ノ常文句チ拾集スル者トナスモ萬不可有ノ考察トモ思ハレス雖然僕ガ此論ヲ爲ス決シテ空中ニ樓閣ヲ構ユルニハアラズ易卦ハ文王以前ニモ占筮ノ用ニ供セシトハ支那學者モ信言スル所ナリ若シ然レハ之ヲ解スルニ何等ノ言詞チカ用ヒシニ相違ナシ其言詞ハ即チ所謂常文句ニアラザリシトハ保スベカラズ次ニ今ノ經文外ニ猶幾多ノ占辭アリシトハ復疑フベキ所ナシ

(今ノ經文ハ孔子ノ次第ニ刪定スル所ナルカモ知ルベカラズ史ニ孔子詩書及易チ序スト云フヲ即チ同意味ナリト見ルモ不可ナシ詩書若シ孔子ノ刪定トセバ易亦或ハ然ラソ詩ニ逸詩アリ易ニ逸辭アリ逸詩逸辭ハ孔子刪定ノ際ニ漏シタル者チ指スト見ルモ妨ナシト雖モ占辭

ノ今ノ經文ニ止ラサルヲハ明カナリ○王應麟曰說卦釋文引荀爽九家集解得逸象三十有一○羅泌路史餘論ニ文王拘囚羑里、用以卜筮加竄絲辭、更改衍數、以立大衍之數、使之可衍トアリ繫辭ハ文周創造之ヲ左傳ニ徵スルニ引用ニアザルチ看破スト云ベシ

スル所ノ絲辭即チ占辭ニシテ今ノ經文ニ符合セザル者一ニシテ足ラズ例ヘバ僖公十五年ノ傳ニ

其卦遇蠱、 曰、千乘三去、三去之餘、得其

雄狐、夫狐蠱必其君也

トアリ語勢チ按スルニ千乘以下雄狐ニ至ルマデ明ニ是レ占辭ナレ也易經更ラニ此文アルナシ又成公十六年傳ニ

公筮之、史曰、吉、其卦遇復、 曰南國蹙、射

其王、々中厥目國蹙王傷、不敗何待、

トアリ是レ亦南國以上厥目ニ至ルマデ明カニ占辭ナレ也易經ニ見ル所ナシ又昭公二十五年ノ傳ニモ蔡墨世間眞ニ龍ナルモノ有リヤ否ヲ論シテ曰ク

周易有之、在乾之之姤、曰潛龍勿用、其同人曰、見龍在田、其大有曰、飛龍在天、其夬曰、亢龍有悔、其坤曰、見群龍無首、坤之剝曰、龍戰于野、若不朝夕見、誰能物之、

此諸語ハ龍戰于野ノ一句ヲ除クノ外ハ易經乾卦ニ在リ龍

戰于野ハ坤卦ニ在リ若シ唯經文ニ據リ龍ト云フ語アルチ

アルヲ許スノ論ナリ然ルニ其文王周公ノ名ニ固着スルノ

刪定ノ際ニ漏シタル者ヲ指スト見ルモ妨ナシト雖モ占辭

此諸語ハ龍戰于野ノ一句ヲ除クノ外ハ易經乾卦ニ在リ龍

戰于野ハ坤卦ニ在リ若シ唯經文ニ據リ龍ト云フ語アルヲ
証スルトセハ乾卦ニ曰ク若クハ坤卦ニ曰クト云テ可ナリ
何ゾ之妬其同人、其大有云々ト云フヲ用ヒンヤ是レ蓋シ
當時易家ノ語ニ乾之妬ヲ潛龍勿用ノ象トシ同人ニ之クテ
見龍在田ノ象トスル等ノ慣習アリシコ因ナルラン深ク此
等ニ因テ思考スル時ハ今ノ經文ハ易家慣習ノ語中ヨリ其
萃ヲ拔キ一休裁ノ書ヲ成シタル者ナルヲ知ルベキナリ
朱子曰易只是爲卜筮而作、故周禮分明言大卜掌三易、古人
於卜筮之官、立之凡數人、秦去古未遠、故周易亦以卜筮
得不焚、今人纔說易是卜筮之書、便以爲辱累了易、見夫子說
許多義理、便以爲易只是說義理、又曰、上古之時民心昧然、不
知吉凶之所在、故聖人作之卜筮、使吉則行之凶則避之、故繫
辭傳云以通天下之志、以定天下之業、以斷天下之疑、正謂此
也、初只有占而無文、往々如今之環玦相似耳、今人因火珠林
起課者、但用其爻、而不用其辭、則知古者之占、往々不待辭而
後見吉凶、至文王周公方作彖爻之辭、使人得其文便觀此辭
之吉凶、至孔子又恐人不知其所以然、故又復逐爻解之、謂此
爻所以吉者、謂以中正也、此爻所以凶者、謂不當位也、明々言
之、使人易曉耳、至如文言之類、却是就上面發明道理、非是聖
人作易、專爲說道理以教人也、須見聖人本意方可學易○朱
子曰、大率天下之道只是善惡而已、但所居之位不同、所處之
時既異、而其幾甚微、只爲天下之人不能通曉、所以聖人因占
筮之法以曉人、使人居則觀象玩辭、動則觀變玩占、不迷於是
非之途、所以是書夏商周皆用之、其所言雖不同、其辭雖不可
盡見、然皆大卜之官掌之以爲占筮之用、是夏商時代亦占辭

アルヲ許スノ論ナリ然ルニ其文王周公ノ名ニ固着スルノ
甚シキヤ文王周公彖辭象辭ヲ繫クト云フ俗說ヲ論破スル
一能ハズシテ自伏羲而下但有此六畫而未由文字可傳、到
得文王周公乃繫之以辭、故曰聖人設卦觀象繫辭焉、而明
吉凶トモ說ケリ是レ明
ニ自家撞着ノ說ナリ
易ノ現狀ハ如此ニシテ廣ク占筮ノ用ニ供セシ所ニ孔門ノ
師弟世ニ出テ易卦變化ノ理ヲ見テ繫辭傳ニモアル如ク
易无思也、无爲也、寂然不動感而遂通天下之故、非天下
之至神、其孰能與於此、
ト歎稱シ易ノ濫輿ヲ窮ムレバ宇宙變化ノ真理ヲ悟ルヲ
得ルト爲シ繫辭傳ニモ
易與天地準、故能彌逢天地之道、仰以觀於天文、俯以察
於地理、是故知幽明之故、原始反終、是故知死生之說、
精氣爲物、游魂爲變是故、知鬼神之情狀、與天地相似、
故不違知周乎萬物而道濟天下、故不過、旁行而不流、樂
天知命、故不憂、安土敦乎仁、故能愛、範圍天地之化而
不過、曲成萬物、而不遺、通乎晝夜之道而知、故神无方而
易无體
精氣ハ一物ナリ分テ二物トナス可ラズ同シ
繫辭傳ニ精義入神ト云フ語アリ同文例ナリ
從來學者之ヲ分ツハ僻說ナリ但シ精氣爲物トハ人間
始メ萬類ノ發生ヲ指シテ云フ同シ繫辭傳中ニ天地網

緼、萬物化醇、男女構精、萬物化生トアリ即チ是レナリ
○或ハ鬼神ト云ヒ或ハ單ニ神ト云フ其實一ナリ共ニ

造化ノ主宰ヲ指シテ云フ中庸ニモ鬼神ノ德ヲ説ク就
テ見ルベシ但シ主宰ノ威嚴犯スベカラザルヨリシテ

言ヘバ鬼ト云ヒ運用巧妙ナルヨリシテ言ヘバ神ト云
フ祭祀ニ云フ所ノ祖先ノ鬼神ハ祖先ノ靈ヲ指ス追遠

思本ノ情ヨリ言ヘハ祖先ノ靈アルナリ然レモ祖先ノ
靈ハ即チ造化鬼神ノ部分ナリ人々各々呼吸ス人皆之

ヲ各人自家ノ呼吸ト稱スレモ呼吸ハ空氣ノ出入ニシ
テ空氣ハ大虛ニ充滿ス各人ノ体中ニ出入スル所ハ各

人ノ呼吸ナリ其体ヲ離レバ則チ大虛ノ空氣ナリ空
氣ト呼吸トハ混然分ツ所ナシ支那理學ノ考ニテハ人

ノ靈魂ノ造化ノ鬼神ニ於ケルモ亦猶此ノ如シ或ハ厲
鬼ト云フ語アリ左傳ニ趙景子問焉伯有猶能爲鬼乎

子產曰匹夫匹婦強死其魂猶以馮依於人、以爲淫厲、
良霄強死、能爲鬼、不亦宜乎トアリ此等ハ鬼字ノ別用

ニシテ其本義ニア
ラズト知ルベシ

ト説ケリ是レ明ニ爻卦ノ易ヲ以テ直チニ宇宙ニ充滿スル
天然ノ易ト同視シ而シテ之ヲ彼ノ造化ノ神ト併ベタルナ

リ抑々吾人眼前ニ見ル所ノ造化變遷ノ迹ハ即チ神德ノ著
ハレタル者ナルガ故ニ繫辭傳ニモ

知變化之理者、其知神之所爲乎

ト説ケリ而シテ易ハ變化ヲ首トシ神ト其体ヲ同ストスル
ガ故ニ其ノ之ヲ重ンズルモ蓋シ故アリ但シ孔門ノ所謂神

トハ他教ニテ説ク所ノ天帝ト其義ヲ同スルカト問ヘバ其
實孔門ノ所見ハ他書ハ姑ラク舍キ易傳ニ見ル所ニテ所謂

「パンスイーズム」(宇宙造化之迹即是神トスル説)ニ過ザ
ルニ似タリ故ニ繫辭傳ニハ

陰陽不測、之謂神

トアリ説卦傳ニハ

神也者妙萬物而爲言者也

トアリ然ルガ故ニ神ノ眞義ヲ極ムル時ハ即チ是レ變化ノ
妙ノミ別ニ箇ノ一物アルニアラザルナリ故ニ程子ハ鬼神

者造化之迹ト解セリ

孔門諸士ノ變化ノ理ヲ見ル此ノ如シ遂ニ此理ニ基キ易ノ
全體ヲ解説シ從來謔語ノ如キニ過ザル卦辭爻辭ニモ一々

道理ヲ付スルトハナリタルナリ其結果ハ即チ十翼ナリ

十翼ノ文亦詰屈聱牙ニシテ解シ易カラザル所アリト雖モ
其大意ハ則チ見ルベシ十翼ノ第一第二ハ彖傳上下トス彖

傳ハ首トシ卦辭ヲ基礎トシ或ハ物理ヨリ或ハ政教論ヨリ

種々ノ觀察ヲ各卦ノ全体ニ下シタル者ナリ朱子モ雖其文
義有非文王之舊者、然讀者各以其意求之、則並行而不悖也

此外各卦ヲ解スル皆此類ナリ第三第四ハ象傳上下ニシテ

ト論セシ位ナリ占辭ハ元來如此ノ深理アリシト謂フ可ラ
ズト雖也觀察ノ妙ハ流石ニ歎稱スベキ者アリ例ヘバ

乾下 即チ六十四卦ノ第一ハ六爻皆陽爻ニシテ陽ノ
最モ盛ナル者ナレバ卦辭ニモ乾元亨利貞トアリ於是乎之

ヲ萬物發生ノ德ニ見立テ乾元ノ二字ヲ鍊リ出シ全卦ノ意
匠ヲ解シテ曰ク

大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形、大
明終始、六位時成、時乘六龍以御天、乾道變化、各正性
命、保合大和、乃利貞、首出庶物萬國咸寧、

又 坤下 即チ六十四卦ノ第二ハ六爻皆陰爻ニ
陰ノ最モ盛ナル者ナリ而シテ卦辭ハ乾卦ニ比スレバ稍

ヤ長ク已ニ讒語ノ氣味アリ於是乎先ツ之ヲ萬物成首ノ德
ニ見立テ坤元ノ二字ヲ鍊リ出シ乾卦ニ映對シテ全卦ノ意
匠ヲ解キ徐々ニ卦辭ヲ解シテ曰ク

至哉坤元、萬物資生、乃順承天、坤厚載物、德合无疆、
含光弘大、品物皆亨、牝馬地類、行地无疆、柔順利貞、
君子攸行、先迷失道、後順得常、西南得朋、乃與類行、
東北喪朋、乃終有慶、安貞之吉、應地无疆、

此外各卦ヲ解スル皆此類ナリ第三第四ハ象傳上下ニシテ

爻辭ノ意ヲ擴充シ說ヲ爲ス彖傳ノ卦辭ニ於ケルガ如シ第

五第六ハ例ノ繫辭傳上下ニシテ十翼中最モ高尚ノ理ヲ說

キタル者ニテ上ニ述ブル八卦六爻重出ノ道理モ首トシテ

此傳ニ論セル者トス其ノ繫辭傳ト稱スルハ卦辭爻辭ヲ合

稱ノ繫辭トシ其ノ傳ト云フノ意ナリト雖也其實朱子モ此

ヲ評シテ或言造化以反易或言易以及造化ト云ヘル如ク其

ノ說ク所ハ卦辭爻辭ノ一章一句ニ拘セラル、一無ク思想

ノ高キ流石ニ孔門ノ盛時ヲ想像スルニ足ル司馬遷此傳中

ナル天下同歸而殊途、一致而百慮ト云フ語ヲ引キ大傳曰

トセルヨリ後人或ハ之ヲ大傳ト稱ス第七ハ文言傳ニノ乾

坤二卦ノ封辭爻辭ヲ解ク蓋シ乾坤二卦ハ易ノ柱石トモ云

フベキ者ナレバ特ニ其傳ヲ作ルモ故ナキニアラズ此傳ハ

彖傳象傳ト稍ヤ其趣ヲ殊ニシ專ラ大人君子ノ氣韻行爲ニ

就テ說ヲ爲ス例ヘバ乾卦ノ始メニ乾元亨利貞トアルヲ解

シテ曰ク
元者善之長也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之
幹也、君子體仁、足以長人、嘉會足以合體、利物足以和

徑路トナシ小石トナシ門闕トナシ闡寺トナシ果赫トナシ
狗トナシ或ハ鼠トナス等ノヲアリテ孔門ノ學士直チニ之
ヲ寫シテ一覽表ヲ作ル如キ意ニテ說卦傳ニ附筆シタル者
ト見ル時ハ其義忽チ氷解ス雜卦ハ支那儒モ云ヘル如ク是
亦當時占筮家ノ慣用文字ナリシカモ知ル可ラス

龍仁夫曰
春秋傳釋

繫辭、所謂屯固比入坤安震殺之屬、以一字斷經義、往々占
筮書多有之、雜卦此類是也、夫子存之爲經翼、非創作也、

雖然此等ハ易傳枝條ノ論ノミ其ノ全体ヲ併セテ觀察スル
時ハ十翼以前ノ易ハ唯占筮ノ用ノミナリシニ十翼併ビ出
ルニ至テ易ヲシテ一種ノ理家タラシメタリ中ニモ其最モ
高尚ナルハ前ニモ云フ如ク繫辭上下二傳トス二傳中ニハ
子曰ノ二字處々ニ散見スルヲ見レハ孔門ノ書タルヲ疑ヒ
ナシ文言傳亦乾坤二卦ノ義ヲ解ク頗ル其妙ヲ盡ス此傳亦
子曰ノ字アリ說卦ニハ子曰ノ字ナシト雖モ其上半ハ繫辭
傳ト緻密ノ關係ヲ有スルヲ見レハ其孔門ノ書タルヲ疑ヒ
ナシ果シテ然レバ易ヲシテ一種ノ理學タラシメシハ孔門
ノ力ナリト云フモ孰レカ之ヲ否ラズト云フヲ得ンヤ而シ
テ孔門諸學士ノ重キヲ易卦ノ理ニ歸スルヲ如此ニ深カリ
シハ前ニモ云フ如ク易ノ變化ハ神變不思議ノ理ヲ具ヘ天

地造化ノ至神ト其体ヲ同フスト考定シタルガ故ニ敢テ占
筮ノ妄誕ヲ駁セズ至誠之ヲ求ムレバ則チ神著筮ヲシテ其
實ヲ告ゲシムルヲアリト假定セルニ似タリ雖然苟モ易ノ
變化ノ眞理ニ冥合スルヲ妄信シ卦爻ノ空文ニ誤ラル、ハ
孔門諸士ノ最モ恐ル、所ナリ故ニ繫辭傳之ヲ斷シテ
神而明之、存乎其人、

トハ云ヘリ

僕ガ周易ヲ讀ミテ得タル所ノ感觸此ノ如シ全体ノ議論猶
未ダ悉サザル所アルベシト雖モ斯ク諸君ノ靜聽ヲ得タル
ハ實ニ僕ノ光榮ナリ幸ニ諸君ノ批難ヲ得バ仍謹テ討論ス
ル所アラントス

畢

瑰崎俊拔之士、每出言輒出于人意之表、尋常陳腐之談、
一經其口、則爲絕特新奇之論、况於幽玄微妙之理乎、末
松青萍瑰崎之士也、一夕會書生將有所講、皆謂是必希
臘之書、若羅馬之律、否則歐洲方今經世之學也、青萍
登壇、徐把周易講之、其辨宏博、足化腐而爲新、論易之
起源、則曰、本於人情而成於數理、論其作者、則曰、是斷
非聖人之書、而聖人之言居多、以歸重于孔門、探玄闡

幽、奇論層出、不惟壓倒一世、殆使千古腐儒北面下拜、一座傾聽、莫不呼奇稱妙、講畢使余論定、余則尋常迂腐之徒、何敢定此書、然固知青萍者也、以青萍之才與識、而好讀希臘羅甸之書、屹々不休、其異日所成就、將大有驚人者、此書足卜之矣、

明治癸未八月書於英南并斯鎮海樓

辱交 菅 桐 南

○ 女子の教育と論じ併せて耶蘇教擴張の法を

説く(前號の續き)

外山 正一

此の論と聞きて宣教師輩の中には成る程余輩が専ら日本婦人の教育に従事したらば其の方の都合はよからむが自分たちと、もと教育が主意で來れる者に非ず耶蘇教と弘めるが趣意で來れる者なり杯と云はんとせらるゝ如き者も定めて有るならむが。余輩の考へてはかゝる説を爲す者は宣教の道を知らざる者と言はざるべからず、いかさまチヨット聞くときは宗旨を弘むる爲め來れる者が教育の事と専ら従事しては肝腎の趣意に背くおとくに

見ゆれども眞に耶蘇教を弘めむと思はゞ宣教師社會にて我が邦上等社會の婦人の教育と一と握り握つてしまふにこしたる手段は有らざるならむ。洗禮を受けて拙者は耶蘇宗で御坐ると看板かける者の數の如きはイヤ知らず眞實最も耶蘇教に化せられたる者の數を増さむと思はゞ諸方をかけまはりてキ、メの薄き説教と爲し居らむよりは深切に教育と爲し乍ら耶蘇教人の品行と服さしめ耶蘇教人の深切に感せしめて教育の間、交際の間次第次第に耶蘇教に歸依せしむるが萬々上策ならむ。耶蘇教を聞かするより寧ろ耶蘇教と見せしむべし。抑何れの邦と論せず其の宗旨と變へさせむと思はゞ先づ其の國の婦人を改宗せしむるに若くは無からむ。婦人と生捕るは男子と生捕るよりはるかに易ければ男子と生捕るよとを務めむよりは寧ろ婦人を生捕るよとを務めざるべからず。而して一たび婦人と生捕りたる上は男子を生捕ることは亦易きのみ。最初西洋人が耶蘇教に歸依するに至りしも婦人の力によりしこと實に少なからざりしなり。且や母親の信仰する所の宗旨は其の子の信仰する所たらざるを稀な

が教育の事、専ら従事しては肝腎の趣意に背くおとくに

仰する所の宗旨は其の子の信仰する所たらざるを稀な

り。一たび我が邦の婦人を耶蘇教に歸依せしめたらば其の子たる者は洗禮と受けしと受けざるに係らず其の精神の如きは必ず耶蘇教の信仰者として成長せむと決して疑ふべからざるなり。

人或は思はむ。我が邦の父兄には耶蘇教家の設けたる學校に其の女子をおくると好まざる者多からむ。殊に中等以上の者は大概皆な宗旨嫌ひなるが故に中等以上の者の女子よしてかゝる學校の生徒たらむ者と至つて少なからむと。この懸念たる一應は尤もの様と聞ゆれども余輩の考へにては、る懸念には決して及ばざるをらむ。余輩の考へにては我が邦中等以上の者が宗旨嫌ひなるはかゝる學校の繁昌の爲めに不利なるよしにわらずして却つて幸のことならむ。何となれば若し我が邦中等以上の人にして土耳其人の如くに某宗旨と深く凝り固まりたるものならむのは其れこそ耶蘇教學校の繁昌なさむ望みは無かるべしと雖も我が邦の中以上の人は何宗とも凝り固まりたる人にわらずして何宗をもおしなべて嫌ふ如きものなるが故に土耳其人の如く既に固まりたる宗旨の有るものよ

比ぶれば却つて始末が宜からむ。殊に我が邦人の宗旨を嫌ふは之と恐る、故に非ずして寧ろ之と輕蔑するによるが故に耶蘇教でも回々教でも之と關係を付けむと我に大いなる實利益を得らるべしと信せむには何宗でも御坐れ之と忽ち睦しくせむとする如きものなればあり。而して今日世間の様子と見るに耶蘇教を餌と使ひて我が邦に實利を得むと欲し爲る耶蘇教の懸慕と仕懸けむとる如き者政府にも民間にも漸く起らむとするが如し。これ耶蘇教の爲めは實に失ふ可からざるの時なり。この時に乘ずることと知らざる耶蘇教人は自ら助くることを知らずして徒らに天の助けを受けむことを願ふ如き愚か物と言はざる可からず。

蓋し婦人の教育も余の論ずるが如き改良を要することの洋行歸りの男子が殖之西洋氣風の男子が殖るに従つて追々切になるは自然の勢として輓近我が邦上等社會の者が婦女子に斯る教育を授けむことを一般に希望するに至らむことは鏡に懸けて見るが如し。このかりに耶蘇教擴張の爲めには實に好機會なり。この時は決して失ふべき時

にあらざるあり今日まで宣教師輩が行ひ來りし宣教の法にては我が邦上等社會の人と耶蘇教に歸依せしめむことは到底能はざるべしと雖も余の説く如き法に従がはむには上等社會の人を耶蘇教に歸依せしめむこと決して難きことにはあらざるならむ。日本人は教育を得むと欲して遂に耶蘇教に引き込まるゝならむ。宣教師輩の宗旨の爲めには教育に従事する事は素を厭ふべからざるなり。日本人は我が欲する所の教育を得む。耶蘇教は其の欲する所の信徒と得む。雙方の爲めに利益多き交易は繁昌せざると云ふことなし。交易のことに英敏なる西洋人にしてこの利益多き交易の氣の付かざるは千慮の一失とは言はざる可からず。余素々宣教師輩がアチコチに設けたる一二の學校あることと知らざるを非すと雖もこれは余の欲する如き資格のものにあらざるのみならず又其の數の少なきを憾むなり。余の欲するは前も言へる如く學科の高尙なることは素より要さるれども男女の外國人の手は可なり揃ひ居らねばならぬものなり。又築地や麻布青山などの如く片よりたる場所にのみ設けずして

五六の學校を東京市中の盛なる場所場所にマンペンなく備へ置くことこそ願はしけれ。文部省が高等女學校と建てられたるは實に結構なることなるが東京市中にたゞ一の女學校では足るべきにあらず。且や高等女學校の如き其の教員の多數は日本人なるが故に女子に高等なる學校教育と授くるよとは素より出来べけれども余が將來の日本婦人に必要なりと信する資格の多分は現今の高等女學校の如きものにては到底充分には得難ならむ。高等女學校として余の欲する如き教育を生徒に授けしめむ爲めには外國教師の數と大いよ増加し其の組織も大いに改めずんばあらざるなり。さりながらよしや高等女學校の組織にして斯の如く其の性質と變ずるとするも尙は數多の女學校を要するよとは免かれ能はざるなり。眞に高等なる學科と生徒に授くる高等の學校は東京市中に一つあれば其れで素より充分なるべしと雖も余輩が廣く中等以上の婦人に必要なりと認むる如き教育を授くる爲めの學校に至りては畢竟我が邦中等以上の婦人をして學校教育と受け乍ら親しく西洋人と交際して其の風俗人情に化せしむ

や麻布青山などの如く片よりたる場所にのみ設けずして

け乍ら親しく西洋人と交際して其の風俗人情に化せしむ

るが大主眼なるが故に課程を高くせむよりは學校の數を
多からしめて成るべきだけ廣く行はれしめむこと素より
願はしきことなり。かゝる目的なるが故にこれ等學校に
於ては既に人の妻にありたるものにて到底正則の課程と
履むと能はざるものゝ爲め又は變則科を設けて西洋人と
交際するの道を開き西洋風のくらし方并に交際のおとよ
り其の他總て西洋の風俗人情の一般に通せしむること
亦最も必要なりとす。

上に陳べたる如き教育を日本婦人が要することは決して
疑ひ無きことなり。而してこの教育のヒトリ宣教師社會
の手を借りて得らるべきものたることも亦疑ひ無き所な
り。ヒトリ疑はしきは宣教師會社の人に余の論を解し得
るもの多く有る無しの一黠のみ。今の宣教師の風として
諸方とかけまはりて既に心のたまりたる日本人にロク
に分らぬ片言かたまことの日本語にてキ、ソの薄き説教と爲すを以
て宣教師の道なりと心得居る者多きが如くなれどもかゝる
宣教師の法は。かたき地面へ僅の氷をパラパラとまくと一
般地に吸ひ込むものが少く蒸發するもの多く到底骨折

損が多きものならむ。これに反して幼き女子の教育より
して取りかゝる如きは柔かき地面に多くの氷をまくと一
般地にしみこむもの多くして蒸發するもの少なし。この
宣教師の如きと最もキ、ソ有るものおして最も儉約なる
ものと言わざる可からず。

○

河豚の種別

松原新之助

河豚の慘毒と違ふする誠に恐るべし此種類概ね皆な毒
性と具ふと雖へども就中頗る劇しき毒あるものは「アカ
メフグ」「ナゴヤフグ」にして「トラフグ」之より亞く只「ヨリ
トフグ」のみは全く毒なきものとす而して其毒たる主と
して其卵巢に在り肉中にも亦之れあり而して其毒の麻酔
性にして恰かも「クラレ」と稱するものに似たり (毒性の
大澤謙二氏の
試験に據る)

河豚の種屬と總稱して河豚屬 (Tetrodon) となす蓋し四
齒の義なり兩髯中央に截痕ありて二つに分る皮硬く脊骨
兩鱗短く鱗線の數寡し熱帯及び暖帯の産しして間々淡水
に産する者あり全地球上に學者の實驗を経たるもの六

十種あり我邦に於ては余が實驗せしもの二十種あり左よ其種別の要點と畧述ぶ

〔第一〕鼻の孔甚だ著しく脊の幅廣きもの

〔甲〕鼻の孔一個の隆起の上ありて左右に各二個相反向するもの

〔イ〕尾の起部の下側に皺襞あるもの

シラマツグ (*Tetrodon laevigatus*, L.)

脊及び兩脇の滑かよして腹に三つの根を具ふる細かさ刺と生す頭の長さは腮の孔と脊鬚との間の長さに均しく尾は老ひたるものみは深く分岐れ幼稚きものには分岐淺く脊は綠色と帯び兩脇は銀色よして腹は白し又腹の刺變じて粉末狀となすものあり是れ其變種にして (*T. inermis*) と稱す亞米利加熱帶の大西洋沿岸及び日本近海に産す

ギンフグ (*Tetrodon lunaris*, Bleek.)

脊の全面よ細かさ刺を被ふるときい之と (*T. lunaris*) と稱し前部のみ刺あるときは即ち變種にして (*T. spadiceus*) と稱す腹は脊と同一の刺を被ふる口部尾部及び兩脇の滑らかよして刺なし頭の長さは項と背鬚との間の長さ

に均しきか或は稍ヤ短きものあり尾には淡綠あり脊の褐色と帯び脇は銀色よして腹は白く罕よと脊に大なる褐色の條あるものあり印度洋太平洋ブラジールの沿岸日本支那近海に産す

サバフグ (*Tetrodon scerstus* Forst.)

頭と脊とは煤色と帯ひ腹は三つの根と具ふる細かさ刺と生し脇は滑かなり體長くし尾部に至りて俄かに窄玄頭の長さは項と脊鬚との間より短く尾に淡綠あり脇に銀色の一條あり其上部の褐色あして黒き斑点あり眼の周圍に褐色の斑あり眼の前部に銀色三角形の斑あり又頤と圍みて褐色の條あり脇の銀色の條に相連なる腮の孔は黒ろし印度洋ポリネシア及び濠洲に産す

カラクサフグ (*Tetrodon oblongus*, Bleek.)

脊腹共に二つの根ある細き刺を生す口部と尾とは滑かにして脊腹の刺針胸翅の前と後とに於て條となして相連らなる頭の長さに項と背鬚との長さに畧均しく尾に岐なし上齒は下齒より小ならず兩眼の距離は口部の長に均しく頭の上と背の中央は褐色よして白き圓形の点あり脇に

於てい不正の條となる或は脇の色脊の中央の色と同一な

のにして元來赤きにあらそ日本支那及び朝鮮近海に産す

於て不正の條となる或は脇の色脊の中央の色と同一なることあり然るときは變種にして (*T. alboplumbinus*) と稱す又罕には胸翅の根上に大なる圓形の黒点あるものあり印度洋日本及び支那近海に産す

トラフグ (*Tetrodon rubripes*, Schleg.)

脊は眼を脊鬚に至るまで細かき刺を生じ腹は全面に脊と同一の刺あり脊腹の刺相分離して決して脇まで連なることなし頭の長さは項と背鬚との間の長さより稍や短く尾の微岐となす兩眼の間は眼球の直径より廣し上齒は中心の溝線の傍に各側より窩と丘あり背鬚の根を繞り淡色の環あり成長に従て漸く淡くなる脊は褐色にして幼稚ものには淡色の條ありて尾に達す此條は老ゆるに従て全く消へるなり胸鰭の根より一の大なる黒斑を存す其他の黒斑漸増加す此條老ゆるも尙ほ永く存することあり然るときは之を變種となしてシマフグ (*T. xanthopterus*) と稱す罕に此シマフグにも胸鰭の根に大なる黒斑を存することあり此種名 (*rubripes*) は赤翅の義にして臀翅の赤色なるを以て名けたるものあれども其色は病の爲め血に由て變色せるも

のにして元來赤きにあらざり日本支那及び朝鮮近海に産すマフグ (*Tetrodon vermicularis*, Schleg.)

體平滑淡色にして不正の短き蠕虫状となせる黒色の斑紋あり之れを「コモンブク」と稱す或は暗色にして不正の淡色なる斑紋あるものあり之れを「マフグ」と稱す皆胸翅と背鬚の根に大なる黒斑あり日本近海にのみあり

カノコフグ又ゴマフグ (*Tetrodon Stictonotus*, Schleg.)

背腹共に二つの根ある小さき刺を生ず口部と尾とは滑かなり背と腹の刺は背鬚の後より於て細く相連なり前より於ては連ならず頭の長さは項と背鬚との距離短く尾は微ましく分岐す兩眼の間は微しく凸起く其幅は口部の長さより廣し背は美褐色と黄褐色の斑紋を生し或は点となす或る時は黄色勝て褐色少きあり或は之れと反するとあり腹は常に白色なり日本及び支那近海に産す

ナゴヤフグ (*Tetrodon pardalis*, Schleg.)

皮に刺なし然れども細かき軟柔なる粟を生ず尾根の皺は分明ならず兩眼の間は平坦にして其幅は口部の長さより窄し翅は尖形をなさず背と脇とは褐色にして不正圓形の

の滑らかにして刺なし頭の長さは項と背鬚との間の長さ

頭の上部和背の中央は褐色にして白き圓形の点あり脇に

黒點を散布し楕圓形の鱗を帯び腹は不潔柑色なり

アカメフグ (*Tetrodon chrysops*, Hilgdt.)

皮に刺なし腹には些少の粟散在し尾側の皺は著せず眼は口部に近くして腮孔は遠し兩眼の間の幅は眼の徑りより倍し頭の長は全身の三分一(尾を除く)背鬣の線十一本ありて尾の微く前部は在り脊帯赤黄色にして腹は淡く粟は暗色を帯ぶ脇は些少の圓形なる黒斑あり眼は金赤色を呈す日本近海にのみ在り

(ロ)尾の下側に皺襞なく表皮平滑なるもの

ヨリトフグ又タカトウフグ (*Tetrodon cutaneus*, Gthr.)

皮は滑かよして且つ薄く脊と脇に甚細かなる無數の縦皺あり尾の下邊は皺なし口部は鈍くして長く眼は口部に遠して腮孔は近し眼は大きくして上下に皺あり眼の直徑は頭の九分の二にして口部の五分の二なり兩眼の間小からず兩眼の間は平坦にして頭長は背鬣と尾との間より稍長し背鬣は小よして九本の線あり尾は短くして分岐せず脊と脇は同じ色にして帯縁灰色腹は白しシントヘレナ喜望峯及び日本近海に産す

シホサイフグ (*Tetrodon porphyreus*, Schleg.)

全體滑かにして尾根の下側に縦襞又は條なし背鬣の線は十四本あり脊は褐色にして細なる白き斑點あり腹は白し(乙)鼻左右に二個づ、ありて突出し孔と具へざるもの 日本近海に産す

テマリフグ (*Tetrodon stellatus*, Gthr.)

全體に細かき刺を生ず而して唇より尾端に至るまで口部短くして鈍く頭の長の五分の二あり或は長さものあり兩眼の間の幅より稍長し兩眼の間は平坦又は微凸なり尾の長は背鬣より尾までの距離は均し腹は老ひたるものは白くして幼稚ものより廣き黒色の條あり腹より斜に後へ斜に背の方に向ふ其條正しあらずして或は分離し或は相連なる罕し腹の中央は之たきものあり而して幼稚の時著して老ひるに従て消失ものと然れども時としては五寸許に成長すに尙ほ其痕跡と存するとあり肛門の周圍は黒環あり脊は黒色或は褐色の斑點あり其點は最も幼稚ものより相連りて併行したる條となす翅は褐色の點あり其點は時としては背鬣と唇翅とこれなきものあり

り胸翅の根の周圍は黒點あり印度洋及び太平洋に産す

口部の長は半す口部の上面少し凹形となす尾部と腹の中

り胸翅の根の周圍は黒點あり印度洋及び太平洋に産す
モンガラフグ (Tetrodon firmamentum, Schleg.)

口部と尾根の後ろと除くの外は全体よ二たつの根を具ふる細き刺を生ず鼻と背鬣との間に於ては刺五十本許ありて列をなす頭の長さは口部の長さに二倍と二分の三ありて兩眼の間の幅と口部より稍し長く穹窿をなす背側は灰色よして腹は淡し脊腹共み隋圓形なる白點あり眼徑より小にして又點と點との距離より小なり日本近海に産す

〔第二〕鼻孔分明ならず脊の上舟底狀をなすもの

キンチャクフグ (Tetrodon rivulatus, Schleg.)

脊に黒點なく波濤狀なる翠色の條あり脊の前部と項の傍よは不規則よして頤よは斜に下方に向ふ口部と尾よは相併行す腹の兩脇にハ柑色無數の小點あり尾側に二つの褐色ある長さ條ありて腮孔に達す然れども老るに従て之を消失す尾も不規則なる翠色の條あり日本近海に産す

ヨコフグ (Tetrodon grammatcephalus, Schleg.)

体は前部漸く高く頭は前部漸く低くして頭と體との間に鈍角となす眼は頭頂に近く眼の間の少しく凹みて其幅

口部の長さ半す口部の上面少し凹形となす尾部と腹の中央を除くの外ハ全體に刺あり又粟を散生す肛門は眼の後端と尾端との中央に在り背鬣腹翅臀翅稍や同長さにして各々體の三分の一あり其端圓形をなす臀翅は肛門の直後即ち背鬣の後端に起り尾端は廣くして後端圓形となす酒浸のものは褐赤色よして背は暗色腹は淡色をなし腹の粟ハ全く白し口部と兩眼の間の共ハ暗褐色の横條あり口部の兩側と眼の下部を走行す頂部にハ半圓狀の縁あり然れども判然たらず日本近海に産す

雜報

○鍍銀新法 電氣の作用に由りて銀メッキを爲すよは一般に甚た毒性なる青化銀^{シヤン}の溶液と用ふるとなるが近頃ゲル、チニン氏ハ此青化銀の代りに沃度銀^{ポタシウム}の水溶液と用ゐたるに頗る好結果を得たり其法ハ先づ硝酸銀六、六六グラム(太約一匁七分六厘)を水の一リットル(太約五合五匁)に溶解し之に沃度^{ポタシウム}の五百グラム(太約百三十二匁)を加へ能く攪拌して透明の溶液と爲

し次に此溶液を以て銀メッキを爲すは通常の如く磨き上たる銅器を此液中に納れ之を電池の陰極に接続し又陽極には純銀若しくは銀の合金と附して成るべく弱き電流と通する時は十分乃至三十分間として其メッキを終るべし然る後別に沃度ポタシウム壹分と水四分とを以て製したる溶液中に其鍍銀物と納れ大に光澤を發するなり此新法は従前の青化ポタシウムを用ふる法よりは稍々不廉なりと雖も其法頗る便利にして且つ日光の爲めに其溶液の分解するとなく永く之を保存すると得れば却て古法に優る利益あるべしと獨乙工業雜誌に見ゆ

○有底管中に於ける大氣の共鳴するを試験する法 底深き器物に水と満て「ランプ」の「ホヤ」と取り半ば水中に挿入し發音したる音叉を「ホヤ」の口に近けながら「ホヤ」を水中まで上げ下げするときは「ホヤ」が適當なる位置に至るとき忽ち「ホヤ」の大氣が共鳴して音叉の音が強くなるなり「ホヤ」を代ゆるは竹筒を以てするも宜しく音叉に代ゆるに漏斗を以てするも宜し

○口腔の共鳴を試験する法 醫師の用ゆる樹脂管付きの

「ステトスコープ」を取り一端と耳又はめ一端を口の前面に近け口を開いて發音することなく唯だ「ア」と云ふ音を發するときの口の形となす時ハ微かに「ア」と云ふ音を聞き「オ」と云ふ時の口の形をなるときは「オ」と云ふ共鳴音を聞くことと得るなり

○奇なる望遠鏡 屈折度の弱き「レンズ」一個と凸面鏡とを取り凸面「レンズ」に於て生じたる遠き處の物体の肖像が凸面鏡の球形中点と分散点の間と於て生ずる様に此の「レンズ」と鏡とを並列し「レンズ」と遠き物体に向け凸面鏡と見るときは鏡中では大にして且つ直立せる肖像が現出するあり此の凸面鏡には屈折度の弱き「レンズ」の一面を墨を塗りたる者と以て代ると得

○虹蜺と説明するに必要なる試験法 暗室の壁に幅一「メリメートル」にして長さ二寸位の鉛直なる細孔を穿ち日光を室内に射入し試験管に清水と満し細孔と並行し之れを置き射入光を試験管の一侧に受くるときハ光は試験管にて全反射を起し暗室の一壁上に美麗なる虹彩色を現そ又同時に二回の全反射を起して他の壁上に弱き虹彩色

と現すなり此の如くして生せしめたる反射光と室内に射

其百年期なるを以て佛國ソナム州モントギギエーに於て

○口腔の共鳴を試験する法 醫師の用ゆる樹脂管付きの

そ又同時に二回の全反射と起して他の壁上に弱き虹彩色

と現すなり此の如くして生せしめたる反射光と室内に射入したる光との角度は精密にも太陽の水滴上に射し來りし光と虹より發する光との角度と同度なるを計測すると得るなり(以上四件簡單物理試法ハ在前)
橋瀧澤賢四郎君の報に依る

○蝦と孚化す 北米合衆國大西洋海岸の北部には *Hyomaris* とて本邦の伊勢蝦位の大きさの蝦あり至て好味のものなるか捕獲の激しきより近年漸乏と告んとするに至りたり中央政府水産委員は早くも此處に注意し近頃ウーヅホールにある其實験場に於て蝦の卵を孚化し又之を遠方に運送する方法とも研究したりしが頗る好結果を得たりと此の割にては不遠して太平洋の海岸にも右の蝦を見るに至るべしと云ふ本邦も之を移し蕃殖を試るも下策にはあらざるべし

○ジャガタ芋 と云へは歐米共に極て普通のものにて我國にても西洋料理と云へは大抵ジャガタ芋の混じ居らざる事はなき位なり然るも歐洲に彼の有用なる植物の來りしは極て新しき事にて佛蘭西にて初めて之を耕せしは一千七百八十六年のとなりしと云ふ即ち今年は調度

其百年期なるを以て佛國ソナム州モントギヂユーに於て先頃其記念の爲め農業共進會を催したりと云ふ

○學者の靴工 英人スマイルス氏(自助論の著者)が先年其傳と記して世に公したるを以て誰一人も知らざる者なきに至りたる學者の靴工トーマスエトワルツは先頃七十余歳の高齢を以て死去したりと云ふ同人はスコットランド國バンフ府の住人にして純然たる靴工なるが是の如き賤業を營む者に似合はず其志甚だ厚く眞に博物學を愛し終日己の業に従事したる後夜中近傍の各地と廻遊して動植物を採集し其慣習と研究するを以て無上の樂となし己の地方の動植物に就き發見したる事實或は新種類は少からざりき遂には學術雜誌に己の論說を出し諸學會の會員と撰舉せらるるに至りたりスマイルス氏一度氏の傳と出版してより其名諸國に轟き皆其志の篤厚なるに感ぜざるものもなく聊其勞と慰めん爲めとて公衆より醵金して金員を同人に送り英國女皇よりも五十磅の年金と賜はる等靴工には珍き榮譽と辱ふしたり

○人類學會 兼て本誌廣告見へたる如く同會ハ以後東

京人類學會と稱する由同會は近頃益盛大に趣き學會中此の如き活潑なるものは少きと云ふ評を受けるに至りたり同會誌第五號に載たる東京近傍古跡指明圖の如は學術上實に有用のものとして同會々員勉強なるを證するに足るものなり又紙質を改良し英語の目錄を附したるは外國と交換の爲め便利ある事なるべし

○鳥花の媒介をなす 蟲は花の受精と助くるとい人の知る所にして本誌第三拾九號矢田部長吉氏の論說中に詳なり然るに近頃フリッツミュラー氏はブラジル國高地に産する *Feijoa* と云へる一種の樹は *Thamnophtilus* 屬の鳥に媒助されて受精すると發見したりと云ふ委細は *Mosmos* (1886, i, 93-98) と見るべし

○ワレス氏 有名なる英國の博物學士ワレス氏はポストン府に於て講義する爲め米國に赴く由

○三重縣中學校 は曩に津田純一氏を校長とし此度又米人ストラー氏を月俸百五圓にて雇ひ専らリヂンクンと教授せしむるに因り生徒も大に競争の姿にて隨ひて各地に至るまで英學傳播の形況あり且つ中學校師範學校とも

悉く洋服を改め中學校の如きは洋食とするようになるべしと同地より報道ありたり

○帝國大學 去る十日午前第八時虎の門内なる工科大学構内に於て帝國大學分科大学卒業證書授與式と舉行せり今其次第と略記するに先づ各分科大学長は本學年卒業の學生に交るゝ卒業證書を授與せり次に渡邊帝國大學總長の演說あり次に本學年卒業生總代として法科大学卒業生植村俊平氏答辭と述べ次に英國公使サル、プランケット氏の祝詞あり次に伊藤内閣總理大臣の演說あり次にプロフェサル、ロスレル氏の演說ありて之れよて式全く了り本學年の卒業生は法科大学法律學科が十名、政治學科が一名、醫科大学に三名、工科大学、土木工學科に十一名、機械工學科が六名、造船學科、電氣工學科、造家學科に各々一名、應用化學科に三名、採礦冶金學科が三名、文科大学哲學科が二名、和文學科に一名、又理科大學物理學科に二名、化學科、動物學科に各一名、植物學科が二名合計四拾九名なり此外別課醫學卒業生六十九名又古典講習科國書課卒業生二十九名ありて當日序と以て卒業證書を授與せられ

たり

又同日午後九時同所に於て帝國大學總長并に渡邊夫人は當日の卒業式と祝する爲大學の教官、學士、本學年の卒業生并に大學に縁固ある内外の貴紳士及び其夫人を延接し且つ餘興として舞踏と催ふされたり同夜招待に應じて來會せし者四百名餘殊に洋服着用の婦人方も多人數ありて午前の簡筆あして且つ嚴肅なる式に反んして餘程賑かなる夜會にてありけり斯くて學者并に貴婦人の會合して共々歡と盡したるとは大學に於て曾て其類を見ざる所にし

述べ次に文科大學長外山正一氏は祝詞と述べ且つ女子教育に關する最も有益なる演説を爲せり之れにて式全了せしを以て同校主幹箕作君は同校役員、教員、生徒一同に代りて來賓諸氏に來臨の旨を謝し畢て茶菓の響應を爲したり同校ハ一と度び東京女子師範學校より分離せし以來大いに盛大に趣き其教則とも多少改良なせしが尙早聞く所み依れば近々同校と一ツ橋通なる舊体操傳習所へ移し米國より婦人教師兩名を雇ひ大に教則と改正して所謂貴婦人の養成に専ら注目さるべしと云ふ記者は女子教育の最高位地み上進するを切望するなり

○東京高等女學校 は去る八日と以て其第二回卒業證書授與式を舉行せり當日の模様は午前第九時同校教員、役員、生徒并に招待と受けて來臨せし貴紳士貴婦人一同着席之上先づ同校主幹箕作佳吉氏は本年卒業の生徒十一名へ夫れく卒業證書と授與せり次に文部省總務局長辻新次氏の祝詞ある筈なりしが同君の山口石川兩縣へ出張せられたるが爲青木保君代つて辻氏の祝詞と朗讀せられたり次に卒業生總代として松原いく子答辭を至極平ひらに

○音樂演習會 去る十日午後一時より上野公園地文部省官舎に於て同會の催しありしが其演奏曲目は第一、管絃樂(リーベス、グルック)第二、唱歌(燕、花鳥、祝へ吾君と)第三、洋琴(ツナテン、ルーツ、グラントツナテ)第四、管絃樂(ポルカ)第五、箏曲(千里の梅、御山獅子、君か代、砧)第六、唱歌(バイレーツ、シーセサンス、フォルスト、グリーンム)第七、洋琴(マーチ、ゴボット)第一及第二に於て此外當日の來賓中よて高崎東京府知事の令嬢は箏曲と又井田元老院議官

の令嬢は洋琴を奏えて大に來會人の喝采を博したり當日の演奏は何れも皆上出來て來會人又充分の満足と興へしが只惜むべきは箏曲の數餘り多くして來會人中或は少しく厭と生したる者なきに非ざりしと云ふの一點なり蓋し箏曲は元來悲歎の感と生せしむるものとして能く盲人の情と適したるものなれば餘り獎勵すべき樂にあらざるべしと信するなり

○劇場改良 本邦劇場改良の事は歐米諸國に留學して少しく彼國の事情に通じ多少彼國の社會に入りたる者の常に相語る所なるが時の至らざりしと由る未だ今日まで其實施を見ざりし然るに近來此説は大ひに勢力を得て聞く所に依れば某顯官も大ひに盡力さるゝとか又學者連中にも餘程熱心家のある由にて今度と云ふ今度こそ初めて劇場改良の實施と見るに至るべしと云ふ

○童幼の成長及体重 デンマルク國コーペンハーゲン府の聾啞院長ハンゼン氏は童幼の成長と其体重との關係に就きて數年來研究し居られしが遂に左の結果と見出されたりと

第一童幼は年中斷へずに成長するものに非ず其体重も又始終増加するに非ずして皆な其期節あり

第二童幼の体重増加するの期節には其成長休止し又其成長の期節又は体重増加せず

第三童幼の体重最も増加するの候は九月にして十二月より翼年の四月までは少しも増加せず

之を要するに童幼の成長最も著しきときは則ち体重の増加最も衰へたるときなり故に秋冬の候には童幼の体重は増加するも成長せず初夏の候より体重の増加休止して成長殊に著しとす

○世界第一の早船 近頃英國に於て造りたる郵便汽船「アイルランド」号は長さ百十五メートル幅十一半メートルにして之れに六千馬力の低壓汽機を裝したり而して其速度は一時間三十八「キロメートル」おして即ち二十半「ノット」なり實に速やきと申すべし此汽船の出來ざる以前には一時間二十九「ノット」を駛るものは實に稀ありしと云ふ又以て晩近學術の大に進みたるを知るべし

批評

日本地震學會英語報告第九冊第一卷

日本地震學報告第九冊第一卷ハ此程同會ヨリ出版セリ
 最初ニシー、ギー、ノットノ地震ノ度數ト題スル論文アリ
 一ケ年間地震度數ノ多寡ハ季候ニ由テ毎子ニ異コシテ毎
 年循環スルモノコシテ茲ニ其循環期ノ律ニ付テ論セリ
 大畧左ノ如シ地震ノ原因トナルヘキモノ一ニ足ラス
 之ヲ大別スレハ下ノ三因ニ歸ス(第一)純粹ナル地下ノ變
 動(第二)日月ノ引力(第三)氣象ノ模様之レナリ總テ日本
 及ヒ北半球ニハ冬季ニ地震多ク又南半球ニハ六月ヨリ九
 月迄(即チ南半球ノ冬)ニ多シ故ニ寒候ニ地震多キヤ明ニ
 ヲ其理由ノ有ル處ヲ探究スルニ之ヲ上ノ三因中ニ求メサ
 ルヲ得ス而シテ(第一)ナル地下ノ變動即チ地層ノ崩壞ニハ
 循環期ノ律アル理由アルヲ見ズ故ニ措テ之ヲ論セス(第
 二)日月ノ引力ハ潮汐ノ満干ニ因シテ更ニ地震ノ原因トナ
 ルヘキハ古ヨリ學者ノ陳フル處ナリ潮ニ毎日、半月、一月、
 半年、一年毎ニ起ル満干アリ果シテ潮ニ地震ノ原因ト

ナラシムルニハ半年或ハ一年毎ニ満干スル潮ナルヘシ然レモ
 (第三)ノ氣象ノ模様コソ地震度數ニ循環ヲ起サシムルニ
 最も緊要ナル原因ナリ毎年冬期ニハシベリヤ地方ノ氣壓
 甚タ高クシテ北大平洋ニハ甚低シ其夏期ニハ全ク之ニ反對
 セリ蓋シ冬期ニ於テ亞細亞大陸并ニ日本ニ氣壓ノ高クシ
 海洋ニ氣壓低キ時ハ其壓力ノ差地震ヲ起サシムルノ原因
 トナル從來暴風ノ時一地方ノ壓力頓ニ減スルヲ見テ地震
 ノ原因ニ歸スル者アリト雖モ斯ル急劇ナル變動ハ地皮ニ
 影況響ヲ及ホス能ハサルナリ又有力ナル一種ノ原因ハ雪
 ナリ冬季ニハ北部ニ堆積スル降雪ノ重量ハ巨大ニ爲ニ
 地皮ヲ壓迫スルナリ果シテ地震ニ循環期アルモノトセハ第
 三因中ノ海陸氣壓ノ差ヨリ生スル力并ニ積雪ノ重量ハ是
 ガレ原因トナルベシ
 次ニ志田林三郎氏ノ論文二章アリ第一ハ電氣ノ強弱方向
 チ自記スル新器械ト題シ同氏新發明ノ器械ヲ掲載ス此ハ
 主トシテ間斷ナク電氣ノ強弱方向ヲ計ルニ用ユルモノナ
 リ從來間斷ナク電氣流通ヲ計ルニハ寫眞器械ヲ用ヒ晝夜
 磁計ノ震動ヲ寫シ撮ルヲ通常トセシカ其器械モ使用法甚

困難ナレハ志田氏ハ一ノ簡便ニシテ且實用ニハ十分ニ精密ナル器械ヲ發見セリ茲ニ大鼓ノ如キ圓壙アリ時計仕掛ニ依テ徐々ニ回轉ス其外圍ニ藥品ヲ塗リタル紙ヲ張り付ケ其紙ノ面ニ數十本ノ鉄針ヲ觸レシム此鉄針ハ各電池ニ續キタリ又別ニ穎敏ナル磁針アリ地電氣ノ流通ニ多少ヲ生スルカ又ハ方向ヲ變化スルキハ回轉ノ電氣ヲ圓壙面ニ接シタル數十ノ鉄針ノ一ヨリ通過セシム爲メニ紙面ニ塗リタル藥ニ化學的ノ變化ヲ起サシムルノ仕掛成此ニ由テ電氣ノ強弱方向ニ變化アルキハ圓壙面ノ各處ニ化學的ノ作用ニ由リテ逐次ニ青色ノ點ヲ印記シ之ヲ接續スレハ曲線ヲ生ス此曲線ヲ見テ流通電氣ノ強弱向方ヲ算定スルナリ

第二ノ論文ハ地電氣ト題シ最初ニ其地磁氣、北光、太陽黑點等ニ密ナル關係アリ又暴風及ヒ地震ト牽攀スヘキヲ説ケリ次ニ地電氣ト地磁氣ノ關係ニ就テナシタル研究ノ結果大西洋電線ヲ利用シタル同様ノ結果ヲ陳ブ次ニ明治十六年長崎釜山ノ間ニ於テ施シタル地電氣ノ觀測ヲ數多ノ曲線及ヒ表ヲ以テ示サレタリ其概要ヲ舉クレハ地電氣ト地磁氣トノ關係ハ甚タ密ニシテ其變化スル性質殆ト同一ナ

リ、電氣流通日々ノ變化甚タ規律アリ一日ニ一回ノ最大及ヒ最小点アリ此最大及ヒ最少流通ノ生スル時間ニハ毎月遲速アリ又流通ノ變化ハ夏及ヒ冬ニ於テ最モ多シ

雜錄

佛阪紀事

内田 周平

參州賭魁有騷動半兵衛者。嘗導捕吏。捕上州賭魁國定忠二。爲忠黨幸二所殺。豆州賭魁丹波屋某爲半義兄。聞之曰。是必幸義父岩五郎所使也。乃令乾兒信太郎圖報讐。其徒十四人屬焉。岩知之。與三乾兒幸二留吉長五及義弟鈴木某。俱避至遠州。飲于濱松酒樓。鈴木劍客也。素矜其勇。使酒罵座。岩候其稍醒。改容言之曰。吾與子義爲兄弟。吾今有戒心。而子乃如此。情誼安在。請自此絕。鈴木憮然曰。吾信有罪。然荷兄恩非一日。請從而觀兄前途。岩遂以四人。往依小松村博徒莊太郎。信等謀知之。造莊太家。要岩等。莊太不肯曰。窮鳥入懷。豈忍殺之乎。南摩羽峰評、博徒之口吻、叙得妙。吾當遣抵神宮寺村。請就而圖之。信等諾而去。岩乃謂三乾兒曰。衆寡不敵。姑避之。讚之金毘羅。幸作色曰。以寡避衆。有何面目復見

人。羽峰評、亦博、留長、自傍、贊之。岩晒曰。前言試之耳。卿等徒之口吻。已如此。雖千萬人吾往矣。四人各理鬪裝。抵神宮寺村博徒莊五郎家。莊五者莊太義兄也。信等踵至。莊五居間勸解。信等不肯。強求共鬪。莊五曰。吾雖無似。以義俠聞一州。不許人之鬪吾域內。自此至參界。不過二里許。越境而鬪可也。信乃聽之。莊五告岩等先去。度其去已可三百步。又縱信等往。岩等步寢疾。信等望之。不見。侮以為怯。堤靜齋評、伏里中少年疾信等之頑。又憐岩等寡少。且欲觀其鬪。多隨岩而行。岩亦料其情。與之偕行。且語曰。敵躡吾後。將伺便擊我。不必問遠參。我欲疾走先據要地。乞指示之。少年為導。抵一要地。名佛阪。彎曲數百步。山壓谷蹙。路甚狹隘。一折上丘。有一茅店。旁依廣圃。岩等乃據焉以待。信率其黨到山腹。時已黃昏。岩黨發一銃。信便拔刀。單身豨突而進。留長與之合。敵十餘人提鎗繼至。岩幸迓之山角。幸為敵槍貫股。仆地。誤斫岩背。岩不顧。大喝揮刀。氣勢倍猛。十餘人辟易而退。幸恍惚中聞刃聲。擡頭視之。見信之在傍。乃奮起斫其背。留長隨斷其右臂。信以左手取刀。瞋目睨二人。會岩返又斷其左臂。信猶張口。欲薄嚙岩。羽峰評、筆言墨語、當時真狀、躍、岩慨出。○中村敬字評、筆下風生、

然拋刀曰。可惜壯夫。我與吾肉以賞子。乃揭臂使嚙焉。幸視岩創曰。爺創亦劇。今弗自決。將為人所獲。請相刺而死。岩曰。未也。當與莊五謀以決生死。少年走報莊五。莊五馳來賀捷。又見信吊之。羽峰評、莊五所為、信未殊。謝曰。不聽兄言。卒至於此。且吾少年時。寄食兄家。今已易姓名。兄或不之記。吾豈忘之。以義父之命不得已及此。請恕。言訖而暝。莊五郎即夜與岩等還家。而鈴木某拾死者所遺刀槍而逃去。羽峰評、劍客變為盜兒、矜勇者果不走恃也。莊五請醫療二人。岩背創八寸許。已縫。數日又開。醫曰。不縫而自癒。岩曰。重傷不勝針縫。他日招人嗤笑。敢請再治。幸亦發破傷風。醫曰。布條蘸火酒以貫洗。可治。二人受療之間。對客閑談。言色自如。卒得癒。羽峯評、之意。岩以武之賭魁。雄視關東。世與勢力忠二駢稱。信本某州士浪士。事在嘉永年間云。

野史氏曰。昔在德川氏之初。任俠出於武士。凌強暴而扶怯弱。蓋有足補政令所不及者。羽峰評、真然、真然、及其末也。武士懦弱。而任俠移于市井。既不知忠義。又無軍法。是以賭博放蕩無賴輩常為之。分黨相爭。往往逞其狂暴。以幕府之威。百僚有司之嚴。尚不能除之。其害不可勝言。維新以來。斯弊大

地磁氣下ノ關係ハ甚々密ニ其變化スル性質殆ト同一

敵。姑避之讚之金毘羅。幸作色曰。以寡避衆。有何面目復見

革。迨今歲首。自註 官更發賭博令。而後掃蕩無復遺矣。抑維

新以前。民間風習可陋者。徃々類此。不迨今記之後世安得

知之乎。余因錄嘗所行於本州者。而傳于世云。羽峰評、

結得好、

南摩羽峰評。善寫博徒之口氣。事實細大不遺。可謂麻姑

搔痒矣。

提靜齋評。義俠氣象。寫得入神。居然史筆。

學會記事

○東京化學會記事 明治十九年四月十日午後三時帝國大

學植物園ニ於テ本會第八年會ヲ開ク。會長櫻井錠二氏起

テ前一年間ノ事業報告ヲ爲ス其要領左ノ如シ

(一)會員 本期中入會シタル者十三名退會シタル者一名

アリ故ニ差引十二名ノ増員アリタリ而シテ昨年三月ニ於

テ會員ノ總數七十四名ナリシヲ以テ現今會員ノ全數ハ八

十六名ナリ

(二)集會并ニ演說談話 例規ニヨリ毎月一回通常會ヲ開

キ而シ七八ノ兩月ハ例ニ由リ休會シタルヲ以テ本期中通

常會ヲ開ク十回ナリ又昨年四月二日本會第七年會ヲ開

キ内外ノ學士貴紳士ヲ招待シ且ツドクトル、ダイブルス

ニ學術上ノ演說ヲ依頼シタリ同氏ノ演說ハ On the Con-

stitution of Non-Saturated Oxygenous Salts ト云ヘル題

ニシテ多年氏ノ研究サレタル實驗ニ關スルモノナレバ最

モ貴重スベキ論說ト云フベシ

本期中通常會ニ於テ會員ノナシタル演說并ニ談話ノ合數

ハ十九項ニシ純正化學ニ關スルモノモアリ應用化學ニ關

スルモノモアリテ一トシテ緊要ナラザルハナシ就中清水

鉄吉氏ノ研究ニ係ル論說并ニ吉田彦六郎氏ノ樟腦油成

分ノ研究ノ如キハ實ニ貴重ノ論說ニシテ歐米ノ學者社會

ニ於テモ最モ好キ評判ヲ得タルモノナリ

(三)會誌 本會々誌ハ毎年三月、六月、九月、及十二月ノ四

期ニ之レヲ刊行スルノ例規ナリ而シテ本期中、出版シタ

ルハ明治十八年三、六、九、十二、并ニ本年三月分都合五冊

ナリ

茲ニ一言シタキハ本會々誌出版期ノ事ニシテ從前之レヲ

以上四回ノ定期ニ出版シタルヲ甚ダ稀ニシテ大抵ハ定期

ヨリ二三ヶ月乃至五六ヶ月後レテ出版スルノ弊風アリシ

カ昨年ノ暮ヨリ今年ニ至リテ初メテ定期通り出版スルニ

務ムベシトノ主旨ニテ演說セラレ次ニ來賓ケル子ル氏

カ昨年ノ暮ヨリ今年ニ至リテ初メテ定期通り出版スルニ至レリ然レモ余ハ之ニテ未ダ満足トセス尙進ンデ出版ノ度ヲ増加センコト切望スルナリ思フニ會員諸君ノ通常會ニ於テ講述サル、論說ハ其數甚ダ少ナカラズ又其性質決シテ外國雜誌ニ現ハル、モノニ劣ラス故ニ若シ諸君カ勉メテ其論說ノ草稿ヲ本會ヘ納ムルコトセハ立派ナル化學雜誌ヲ毎月一回出版スルハ決シテ難事ニアラサルベシ

(四)譯語 化學譯語中普通ノ部ハ既ニ議定シ目下化學命名法取調中ナリ其委員ハ松井、高松、久原、磯野ノ四氏ト并ニ余ノ五名ニテ數回集會ヲ開キ無機化學ニ關スル分ハ大畧了リタレモ有機化學ニ屬スル部ハ未ダ着手ニ至ラス命名法ノ一事ハ化學ヲ講究スルニモ亦之レヲ教導スルニモ至テ緊要ナルモノナレハ余ハ本會ニ於テ最モ正美完全ナルモノヲ編輯センコト希望スルナリ

(五)寄贈品 本期中本會ヘ寄贈ノ物品ハ雜誌類八十冊、バムフレット類十一冊、書籍類三冊、報告類二冊、及表類六葉合計百貳種ナリ

次ニ來賓渡邊洪基氏理化兩學ノ功益ヲ民間ニ傳播スルヲ

務ムベシトノ主旨ニテ演說セラレ次ニ來賓ケルチル氏 Application of Human Excreta for Manuring Purpose: Department of Urea toward the Soilノ題ニテ演說セラレ右畢リテ會員ノ研究ニ係ハル論說及標品其他化學上珍奇ナル物品書類等ヲ參觀シ其後一同晚餐シ午后八時散會ス本日招待ニ應シテ集會セラレタル來賓ハ渡邊洪基、折田彦市、菊池大麓、矢田部良吉、大澤謙二、志田林三郎、山川健次郎、ワグチル、ダイブルス、フェスカ、ケルチルノ十一君ニシテ臨席會員ハ三十二名ナリ

明治十九年五月一日、午后一時第一高等中學校ニ於テ會ス櫻井錠二氏會長席ニ着キ書記坪井久馬三氏三月通常會并ニ四月第八年會ノ記事ヲ朗讀シ全會ノ保認ヲ得又寄贈ノ書目ヲ報告ス

次ニ袖木松之助、山寺容麿、齋藤賢治ノ三氏ノ准員トシテ入會ヲ許諾ス

當日演說并ニ談話左ノ如シ

牡丹皮試驗補遺 田原 良純氏

鹽化フタリール構造 久原 躬弦氏

鉄中ノ硫黄ヲ定量スル新法

石藤 豊太氏

簡器ニ空氣中ノ酸素ヲ定量スル法并ニ器械ノ説明

久原 躬弦氏

サツカリノ製法、性質并ニ應用

高松 豊吉氏

本日出席會員十四名ナリ

同五月十五日午後一時第一高等中學校ニ於テ開會ス櫻井

錠二氏會長席ニ着キ書記坪井久馬三氏前會ノ記事ヲ朗讀

シ全會ノ保認ヲ得又寄贈書目ヲ報告ス

加藤常七郎氏ハ都合ニヨリ退會致シ度旨申込マレタルニ

付其退會ヲ承認ス

東京藥學會社及地學會ヨリ其會誌ト本會々誌トノ交換キ

申込マレタルニ付協議ノ上自今之ヲ交換スルコトニ決ス

次ニ役員指名委員ハ全會員ヨリ之ヲ投票キ以テ撰舉シ

其定員ヲ五名トスルニ決ス此決議ニヨリ久原、高山、高松、

石藤、坪井ノ五氏本年ノ役員指名委員ニ當撰ス

本日演說左ノ如シ

亞硫酸并ニ硫化水素ノ亞硝酸鹽類ニ於ケル作用

堀和 爲昌氏

澱粉ヲ結晶砂糖ニ化スル法

石藤 豊太氏

純粹亞鉛ノ性質

同 氏

本日出席會員十五名ナリ

社告

○弊社雜誌ノ儀ニ付愛顧諸賢ヨリ本社ヘ宛テ御投寄下サレ候御書信中或筆意ノ高雅ナル筆勢ノ快奔ナルコト過キ御宿所御姓名ヲ辨シ兼テ候事モ之アリ之ガ爲メ雜誌郵送等ニ差支ヲ生シ殆ンド困却仕候仍テ以後ハ御面倒恐入候得共何卒御宿所御姓名等ハ成ベク明瞭ニ御記シ奉伏冀候

○幣社雜誌御購讀諸賢ヨリ雜誌代價ヲ郵便小爲替ニテ御送付ニ相成其證書面ノ拂渡郵便局名及請取人氏名ノ部分ヲ空紙ニテ御送付ニ相成候方間々有之右コトハ如何様ノ間違相生シ候哉モ難斗候ニ付將來ハ該證書面ノ拂渡郵便局名ノ左側ニ東京内神田請取人氏名ノ下段ニハ東京神田裏神保町壹番地東洋學藝社ト必ス御記入之上御送付被成下度若御記入無之ニ由リ如何ナル間違相生シ候トモ本社ニ於テハ其責ニ任セス候此段廣告仕候

○弊社發賣ノ東洋學藝雜誌一タビ江湖ノ高評ヲ獲テヨリ看客諸君ノ信愛漸ク深キニ隨ヒ發兌部數モ亦々自カラ多キチ加フ而シテ博雅諸氏ノ神草鬼稿陸續投寄殆ント几チ埋ムニ至ル是ニ於テ丁數增加スルノミナラズ或ハ精密ナル圖畫ヲ挿ムニ因リ最上精良ノ紙質ヲ擇ムガ爲メニ重量益々加リ遂ニ郵稅金貳錢ヲ要スルコト至ルモノ屢コレ有リ既ニシテ紙質ノ撰擇丁數ノ増加益々進ノテ止マズ其レ此ノ如クハ將來増稅ヲ要スルモノ蓋シ亦タ少ナカラシ依テ今後(本年八月則雜誌第五十九號)發兌ノ分ヨリ増稅ヲ要スルモノアルトキハ豫テ御預リ前金ノ内チ以テ仕拂置キ退テ精算相立ヘキニ付此旨豫メ御了諾アラシコトヲ乞フ敬白

○物理學用普通臺

澱粉ヲ結晶砂糖ニ化スル法

石藤 豊太氏

金ノ内ヲ以テ仕拂置キ退テ精算相立ヘキニ付此旨豫メ御了諾アラシコトヲ乞フ敬白

社告

東洋學藝雜誌 自第壹號 至第拾號 合本壹册

右第三版賣價金七拾五錢

東洋學藝雜誌 自第拾壹號 至第貳拾號 合本壹册

右第二版賣價金八拾五錢

東洋學藝雜誌第五十六號 明治十九年五月廿五日發兌

目錄

○人体ニ住ム蟲ノ話 理科大學教授 飯島魁

○支那史体ヲ難ス 末松青萍

○地文學講義第三回(海流及潮汐) 理科大學教授 小藤文次郎

○わたくし志のぞやつたげんふれれ 志るす 高等師範學校教諭 後藤牧太

○微粒子病ノ説(前號ノ續キ) 駒場農學校助教理學士 佐々木忠次郎

○雜報數件

○雜錄 ○矢田部良吉氏の説を駁したる書

○簡 ○在獨逸國井上哲次郎氏來翰

○學會記事 ○東京數學物理學會

東洋學藝雜誌第五十七號 明治十九年六月廿五日發兌

目錄

○女子の教育を論じ併て耶蘇教擴張の法を説く

文科大學教授 外山正一

○物理學用普通臺 第一高等中學校教諭 村岡 範爲 馳

○周易起源 末松 謙 澄

○微粒子病之説 駒場農學校助教理學士 佐々木忠次郎

○支那戰國人民の氣質を論ず 文科大學 赤座 好義

○雜報數件

○批評

○グレーズブルック、シヤウニ氏の物理實驗法 理科大學教師 ノット氏

○マカリステル氏有脊及無脊動物書 理科大學教授 箕作 佳吉

○明治十八年地理局地震報告

○雜錄 文科大學 内田 周平

○補文館記 右發兌仕候ニ付舊ニ倍シ陸續御購用アラシコトヲ願フ

東京神田裏神保町一番地 東洋學藝社

○東京人類學會

本會從來單に人類學會と稱したる處今回東京の二字を冠せしに付此段廣告す○本會の目的は人類の解剖、生理、遺傳、發育、變遷、開化等を研究して人類に關する自然の理と明にするにあり○毎月報告と出版して會員に頒つ○規則と要する人は郵便切手二錢封し込みにて東京下谷仲徒町一丁目二十二番地東京人類學會事務所神保小虎方へ問ひ合さる可し

Romaji-Kai Kaikin ni Tsugu.

羅馬字雜誌ノ材料トナル可キモノヲ羅馬字文ニアラズトモ簡易ノ漢字假字混淆文ニテ御認メ御遣シ相成候ハミ之ヲ字譯シテ掲載可致候尤モ紙數ニ限アルヲ故盡クハ載セ

